

第4章 土 器

本遺跡における第1次～第5次の発掘調査によって出土した土器のうち、弥生式土器については報告書「瓜郷」において久永春男氏により3層6様式に分類されている。すなわち下層第1様式・下層第1様式亜式・中層第1様式・中層第2様式・上層第1様式・上層第2様式である。今回の調査で出土した弥生式土器も前回と同じ様相をもっており、その分類と編年を継承し新出を補った。今回の調査で、瓜郷遺跡においては初めて遺構が検出され、上層第2様式に継続する営みの存在が明らかになった。古式土師器を上層第3様式として扱うこととした。遺構出土土器は遺構単位で古→新の順に、包含層出土土器は様式順に扱うことにする。

第1節 第1トレンチの土器

1、遺構出土の土器（表第9）

（1）SK-1出土土器（挿図第26の1～14）

1～4・9は中層第1様式で、1～4は壺形土器の上胴部、9は甕形土器第1類の口縁部である。5・11は中層第2様式で、5は壺形土器の上胴部、11は甕形土器第1類の口縁部である。6～8・10は上層第1様式で、7は口端部を欠くがほぼ完形の壺形土器、8は壺形土器第1類の口縁部。6は高坏形土器第1類A類の脚部、10は甕形土器の口縁部である。12は上層第2様式の鉢形土器の口縁部である。13・14は上層第3様式の甕形土器第3類の口縁部である。

（2）SK-2出土土器（挿図第26の15～19）

15は下層第1様式の壺形土器の上胴部。16・17は中層第1様式の壺形土器で、16は口縁部、17は上胴部である。18は上層第1様式の甕形土器の口縁部。19は上層第2様式の高坏形土器第1類の脚部である。

（3）SK-10出土土器（挿図第26の20～24）

20～22は中層第2様式で、20・21は壺形土器第1類の上胴部、22は甕形土器第1類の口縁部から胴部である。23・24は上層第2～第3様式の高坏形土器の脚部である。

（4）SB-11出土土器（挿図第27の25～41、図版第7の2）

25～30は中層第2様式で25～27は壺形土器である。25は細頸頸甕形土器第2類の口縁部、26・27は上胴部である。28は高坏形土器第1類の口縁部である。29～36は上層第1様式で、29～31は壺形土器で、29・30は上胴部、31は頸部である。32・33は高坏形土器の第1類A類の口縁部、34は高坏形土器の脚部。35・36は甕形土器で、36は脚台である。37～40は上層第2様式で、37は甕形壺形土器の口縁部、38は短頸広口壺形土器の口縁部、39は小形壺形土器第1類、40は短頸広口壺形土器、41は甕形壺形土器の口縁部である。完形品である39・40が本土壤の時期を示すのであろう。

(5) SK-13出土土器 (挿図第27の42~46)

42は上層第1様式の高坏形土器第1類の脚部。43は上層第2様式の赤彩壺形土器の上胴部である。
44~46は行基焼第2~第3型式の山茶碗の口縁部と底部である。

(6) SK-15出土土器 (挿図第39の338~341)

338~341は中層第1様式の壺形土器の上胴部である。

(7) SK-16出土土器 (挿図第27の47・48)

47・48は上層第2様式で、47は高坏形土器第2類の口縁部、48は甕形土器の脚台部である。

(8) SK-18出土土器 (挿図第27の49~51)

49は上層第1様式の壺形土器の上胴部である。50・51は上層第2様式の高坏形土器第2類の口縁部である。

(9) SK-19出土土器 (挿図第28の52~54)

52~54は中層第1様式の壺形土器の上胴部である。

(10) SK-21出土土器 (挿図第28の55・56)

ともに中層第2様式で55は壺形土器第1類の上胴部、56は甕形土器の脚部である。

(11) SK-22出土土器 (挿図第28の57・58)

57は下層第1様式の壺形土器の上胴部。58は上層第1様式の壺形土器の上胴部である。

(12) SK-23出土土器 (挿図第28の59・60)

59・60は下層第1様式の壺形土器で、59は細頸壺形土器の口縁部、60は上胴部である。

(13) SK-24出土土器 (挿図第28の61)

61は中層第2様式の高坏形土器の脚部である。

(14) SK-28出土土器 (挿図第28の62~64)

62・64は上層第1様式で、62は壺形土器の上胴部、64は甕形土器の口縁部である。63は上層第3様式の壺形土器の口縁部で、いわゆる柳ヶ坪式壺形土器の系譜に繋がるものである。

(15) SK-34出土土器 (挿図第28の65・66)

65・66は中層第2様式の壺形土器の上胴部である。

(16) SK-37出土土器 (挿図第28の67・68)

67は上層第1様式の高坏形土器の脚部である。68は下層第1様式の壺形土器の上胴部である。

(17) SK-39出土土器 (挿図第28の69)

69は中層第2様式の壺形土器の上胴部である。

(18) SK-42出土土器 (挿図第28の70・71)

70・71は中層第2様式で、70は壺形土器の上胴部、71は高坏形土器の脚端部である。

(19) SK-44出土土器 (挿図第28の72・73)

72は中層第1様式の壺形土器の上胴部、73は中層第2様式の高坏形土器第1類の口縁部である。

(20) SK-48出土土器 (挿図第28の74・75)

74・75は下層第1様式で、74は壺形土器の上胴部、75は受口壺形土器の口縁部である。

(21) SK-51出土土器 (挿図第28の76~第29の100)

76～98・100は下層第1様式である。76は受口壺形土器の口縁部、77・78は壺形土器の口縁部、79～91は壺形土器の上胴部である。90は $R < \frac{1}{L}$ の縄文が施されている。92～98・100は甕形土器第1類の口縁部である。99は中層第2様式の小型の甕形土器第2類の口縁部である。

(22) S K - 53出土土器 (挿図第29の101～第30の105)

101～104は下層第1様式で、101・102は壺形土器の上胴部、103は壺形土器の口縁部、104は甕形土器第1類の口縁部である。105は上層第1様式の甕形土器の口縁部～上胴部である。

(23) S K - 54出土土器 (挿図第30の106～113)

106は中層第2様式の高坏形土器第2類の口縁部である。107～112は上層第1様式で、107・108は壺形土器の上胴部、109は壺形土器第3類の口縁部、110は壺形土器第1類の口縁部、111は赤彩の高坏形土器の脚部、112は甕形土器の口縁部である。113は上層第2～第3様式の赤彩壺形土器の上胴部である。

(24) S K - 55出土土器 (挿図第30の114～120)

114～116は上層第1様式の壺形土器である。114は赤彩壺形土器の上胴部、115は壺形土器の上胴部、116は壺形土器の上胴部で $L < \frac{R}{R}$ の縄文が押捺されている。117は甕形土器の脚端部である。118は上層第3様式のS字口縁甕形土器第3類B類の口縁部である。119は平安朝瓷器の無台碗の底部である。120は行基焼の山茶碗の口縁部である。

(25) S K - 56出土土器 (挿図第30の121、図版第12の1)

121は平安朝瓷器の把手付長頸壺である。口縁部内面と上胴部に施軸している。

(26) S K - 57出土土器 (挿図第30の122～128)

122は中層第2様式の壺形土器の上胴部。123は上層第1様式の高坏形土器第1類の口縁部、124は第2類の脚端部である。125は上層第2様式の甕形土器第2類の口縁部。126は上層第3様式の甕形土器第2類の口縁部である。127は平安朝瓷器の無台碗、128は行基焼第3型式の山茶碗である。

(27) S K - 59出土土器 (挿図第31の129・130)

129は上層第1様式の壺形土器の上胴部。130は上層第2様式の高坏形土器の脚頭部である。

(28) S K - 63出土土器 (挿図第31の131～134)

134は下層第1様式の甕形土器第1類の口縁部である。131は下層第1様式壺形土器の上胴部。132は中層第2様式の壺形土器の上胴部、133は中層第1様式の甕形土器第1類の口縁部であろう。

(29) S B - 67出土土器 (挿図第31の135～150)

135～139・146～149は下層第1様式で、135は無頸壺形土器の口縁部、136・137は壺形土器の口縁部、139～141は壺形土器の上胴部である。146は甕形土器の底部中央に穿孔した甕、147～149は甕形土器第1類の口縁部である。142～145は下層第1様式壺形土器の上胴部である。150は筒形の器台で、下層第1様式か下層第1様式壺形土器であろう。

(30) S K - 69出土土器 (挿図第31の151～155)

151～154は下層第1様式で、151・152は壺形土器の上胴部、153・154は甕形土器第2類の口縁部である。155は中層第2様式の甕形土器第3類の口縁部であろう。

(31) S K - 73出土土器 (挿図第31の156～第32の187)

156～186は下層第1様式である。157・161は受口壺形土器の口縁部、156は細頸壺形土器の口縁部、158～160は壺形土器の口縁部、162～178は壺形土器の上胴部で、163は赤彩である。179は甕形土器の底部。180～186は甕形土器第1類の口縁部である。187は上層第2様式の高坏形土器第2類の口縁部で埋土の上層出土である。

(32) S B - 75出土土器 (挿図第33の188～195)

188は下層第1様式の細頸壺形土器の口縁部である。189は中層第1様式の壺形土器の口縁部～上胴部。190～192は上層第1様式で、190は壺形土器の上胴部、191は赤彩壺形土器の頸部、192は高坏形土器第1類の口縁部である。193は上層第2様式の甕形壺形土器の口縁部、195は小型壺形土器の頸部から上胴部。194は上層第3様式の高坏形土器B類の口縁部である。

(33) S K - 76出土土器 (挿図第33の196～200)

196は下層第1様式の受口壺形土器の口縁部、198・199は壺形土器の上胴部、200は甕形土器第1類の口縁部である。197は下層第1様式壺式の壺形土器の上胴部である。

(34) S K - 78出土土器 (挿図第33の201～第34の206)

201～204は下層第1様式で、201は受口壺形土器の口縁部、202・203は壺形土器の口縁部、204は壺形土器の頸部である。205・206は上層第1様式で、205は壺形土器の上胴部、206は甕形土器で脚台の有無は不明である。

(35) S K - 79出土土器 (挿図第34の207～213、第39の342～345)

207～213は上層第1様式である。207・210・342は壺形土器第3類の口縁部、208は壺形土器第1類の口縁部。211は小型坑形土器、209・212は受口状甕形土器の口縁部、213は高坏形土器の脚部である。343～345は上層第2様式で、343は壺形土器第1類の口縁部、344は甕形土器の脚台である。345は上層第3様式の高坏形土器第2類の口縁部である。

(36) S K - 80出土土器 (挿図第33の214)

214は上層第1様式?の甕形土器の口縁部である。

(37) S K - 82出土土器 (挿図第34の215～第35の226、図版第12の2・第13の1・2)

215・225・226は上層第1様式で、215は壺形土器の上胴部、225は甕形土器の口縁部、226は甕形土器の脚台部である。216～224は上層第2様式で、216・218は壺形土器第1類の口縁部～上胴部、217は小型壺形土器、219・220は甕形壺形土器の口縁部と胴部である。221・222は高坏形土器の坏下部から脚頭部で、223は第2類、224は第1類である。

(38) S K - 83出土土器 (挿図第35の227・228)

227は中層第2様式の壺形土器の上胴部、228は上層第2様式の高坏形土器の脚頭部である。

(39) S K - 84出土土器 (挿図第35の229・230)

229・230は中層第2様式で、230は壺形土器の上胴部、229は鉢形土器の口縁部である。

(40) S K - 86出土土器 (挿図第35の231)

231は下層第1様式の壺形土器の上胴部である。

(41) S K - 87出土土器 (挿図第35の232)

232は上層第1様式の甕形土器の口縁部である。

(42) SK-90出土土器 (挿図第35の233～第36の241)

233・234は下層第1様式の壺形土器の上胴部である。235・236は中層第2様式で、235は受口の細頸壺形土器の口縁部で外面に赤彩を施しており、236は高坏形土器第1類の口縁部である。237～240は上層第1様式で、237は壺形土器第1類の口縁部、236は第1類の上胴部、240は第3類の口縁部、239は高坏形土器第1類の口縁部である。241は上層第2様式の複合口縁壺形土器の口縁部で刻目を付けた棒状貼付文を配しており、外来系土器であろう。

(43) SK-93出土土器 (挿図第36の242～247)

242～247は下層第1様式で、242・243は壺形土器の上胴部、244～247は甕形土器第1類の口縁部である。

(44) SK-95出土土器 (挿図第36の248～257)

248～254は下層第1様式の壺形土器で、248は細頸壺形土器第1類の口頸部、249～251・253は壺形土器の上胴部、252は第3類の上胴部であろう。256は中層第2様式の壺形土器の上胴部。255・257は上層第1様式で、257は壺形土器第3類の口縁部、255は高坏形土器の脚部である。

(45) SK-97出土土器 (挿図第36の258～260)

260は下層第1様式の甕形土器第1類。258は中層第2様式の壺形土器の上胴部、259は上層第1様式の壺形土器第3類の口縁部である。

(46) SK-98出土土器 (挿図第36の261～第37の283、図版第14の1・2)

261～265は下層第1様式で261～263は壺形土器の上胴部、264・265は甕形土器第1類の口縁部である。266～268は中層第1様式で、266・267は壺形土器の上胴部、268甕形土器第1類の口縁部である。269～276は上層第1様式で、269は壺形土器第1類の口頸部、271は壺形土器の頸部～上胴部、272は赤彩の高坏形土器の脚部、273～275は甕形土器の口縁部、276・277は鉢形土器第2類の口縁部である。278～283は上層第2様式で、278は甕系土器の体部、279は甕系壺形土器の口縁部、280～282は高坏形土器第2類の口縁部、283は脚部である。

(47) SB-102出土土器 (挿図第37の284～288)

285～288は下層第1様式で、285～286は壺形土器の口縁部、287は壺形土器の上胴部、288は甕形土器第1類の口縁部である。284は受口壺形土器の口縁部で、中層第1様式であろうか。

(48) SK-103出土土器 (挿図第37の289)

289は中層第2様式の壺形土器の上胴部で赤彩である。

(49) SK-108出土土器 (挿図第37の290～295)

290～294は中層第2様式の壺形土器で、290は第3類の口縁部、291～294は上胴部である。295は上層第1様式の壺形土器の上胴部で、上下2段の撚糸文帯の間を細線で画して赤彩を加えた無文帯を設けており、外来系の土器である。

(50) SK-109出土土器 (挿図第38の296～298)

296～298は中層第2様式で、296・297は壺形土器の上胴部、298は甕形土器第3類の口縁部である。

(51) SK-112出土土器 (挿図第38の299)

299は上層第2様式の高坏形土器の脚部である。

(52) SK-114出土土器 (挿図第38の300~306)

300は下層第1様式の壺形土器の上胴部。301~305は上層第1様式で、301・302は壺形土器第3類の口縁部、303は第1類の口縁部、305は高坏形土器の脚端部、304は甍形土器の口縁部。306は上層第2様式の器台形土器の口縁部であろう。

(53) SK-116出土土器 (挿図第38の307~309)

307~310は下層第1様式で、307・308は細頸壺形土器第1類A類の口縁部と頸部、309は壺形土器の上胴部である。

(54) SK-117出土土器 (挿図第38の310)

310は下層第1様式の受口壺形土器の口縁部である。

(55) SK-120出土土器 (挿図第38の311)

311は上層第2~第3様式の高坏形土器第3類で、外来系土器であろう。

(56) SK-121出土土器 (挿図第38の312・313)

312・313は上層第2様式である。312は壺形土器第2類の口縁部、313は甍形土器第3類の口縁部である。

(57) SK-122出土土器 (挿図第38の314・315)

314・315は下層第1様式の壺形土器で、ともに上胴部である。

(58) SK-124出土土器 (挿図第39の316)

316は上層第2~第3様式で、高坏形土器の脚部である。

(59) SK-128出土土器 (挿図第39の317・318)

317・318は下層第1様式で、317は壺形土器の上胴部、318は甍形土器第1類の口縁部である。

(60) SK-129出土土器 (挿図第39の319~329)

319~329は中層第2様式で、319~321は壺形土器第1類の口縁部、323~325は高坏形土器第1類の口縁部、326~328は高坏形土器の脚端部で、328は赤彩である。326は円孔と横線で飾っており、別の器種である可能性もある。329は甍形土器第2類の口縁部である。322は上層第1様式の壺形土器の頸部である。

(61) SK-131出土土器 (挿図第39の330・331)

330は中層第2様式の甍形土器の脚部。331は上層第1様式の甍形土器の口縁部である。

(62) SK-141出土土器 (挿図第39の332)

332は上層第1様式の高坏形土器第1類の口縁部である。

(63) SK-149出土土器 (挿図第39の333~336)

333は下層第1様式の壺形土器の上胴部。334は上層第1様式の壺形土器の上胴部。335は上層第2~第3様式の高坏形土器の脚部。336は上層第3様式の甍形土器第4類の口縁部である。

(64) SB-150出土土器 (挿図第39の337)

337は下層第1様式の受口壺形土器の口縁部である。

2、包含層出土の土器

(1) 下層第1様式(挿図第40の346~第42の423)

壺形土器 下腹部の張った器体に、大きく外方に開いた口頸部を付けた形態である。頸部につづく肩の部分がふくらみ、その下方で少しくびれて甗を連想するような形に作られているものもある。

口縁部文様帯

- a) 口唇部に竈または貝殻の腹縁による刺突文列を施したものの
- b) a) に指頭又は棒による単独圧痕を加えたものの
- c) 櫛で横線・断続横線・波文を描いたものの
- d) 圧痕を加えた突帯をめぐらしたものの

頸部文様帯

- a) 歯の緻密な櫛状器具によって幅広く横線帯を描いたものの
- b) 横線帯から口縁に向けて放射状に竈又は櫛で撥上文様を描いたものの
- c) 竈で数条の横線をめぐらしそこから竈で撥上文様を加えたものの

肩部文様帯

文様帯と文様帯との中間の無文帯が研磨されているもの(A類構図)と各部の文様帯が相接したもの(B類構図)がある。

- a) 斜格文を配したものの
- b) 櫛描横線帯に櫛・竈描縦線・斜線を加えたものの
- c) 櫛・竈描斜線帯に竈描きの連弧文・縦線を加えたものの
- d) 肩部文様帯の上下に、2条の平行線間に竈・貝殻の腹縁による刺突文列を加えた細い文様帯を配したものの

腹部文様

A類構図 無文帯をはさんで文様帯を区分したもの

- a) 櫛描横線帯に櫛または竈で縦線を加えたものの
- b) 櫛描横線帯に斜線を加えたものの
- c) 頸部および肩部文様帯においても見られた図柄を繰返し、文様帯の最下段は無文帯で終わるものの
- d) 文様帯の最下段だけは上部の文様帯に接続して櫛描き横線帯を配したものの
- e) d) の櫛描横線帯に竈あるいは櫛によって連弧文を描き添えたものの

B類構図 各部の文様帯が相接続したもの

第1類 全面に櫛状器具による横線を施すか、肩部にわずかの斜線帯または斜格文帯をおき、これに接続して上腹部全体を一つの櫛描横線帯とし、この横線帯を区分するがごとくに、櫛描きの直線または波文をところどころに縦位に加え、さらに竈描きまたは櫛描きの下弦連弧文を加える。

第2類 櫛描横線によって文様帯を区分しつつ相接続せしめたもの

- a) 櫛描斜線を各段毎に傾斜を逆にして羽状に配したものの
- b) 櫛描横線帯の上下に櫛描縦線帯をおき、上段の縦線帯と次の横線帯には竈描連弧文を加え、下段の縦線帯には竈描鋸歯状斜線列を加えたものの

c) 櫛描横線帯に篋描連弧文を加え、その上段には斜格文、下段には斜線帯を配したものを346～351は壺形土器の口縁部である。359～392・394～396は頸部・上胴部である。377は文様帯の間に無文帯を挟むA類構図で、下胴部を備えている。359～376・378～392・395・396はB類構図である。382・394は押引文や刺突文を加えた突帯を巡らしたものである。

受口壺形土器 大きく外方へ開いた口辺部をさらに上向きに折曲げて受け口にする。下腹部が張った器体で、肩部にくびれが作り出されているものと、くびれないものがある。

355～358はその口縁部である。

細頸壺形土器 次の3類に分類されている。

第1類 弓なりに外半した細い口頸部に、丸い腹部を配したやや長手の器形である。A類構図とB類構図がある。

第2類 頸部が筒状で細長く、それが急にふくらんで球形の腹部となる形態である。縄文や半割竹管による爪形文が用いられる。

第3類 口縁部がくの字形に内方へ屈折している。

352～354は第1類の口縁部で、354は赤彩である。

無頸壺形土器 393は口縁部で、口縁部の一箇所に円孔が穿たれている。

器台形土器 150は筒形で、下層第1様式か同亜式であろう。

甕(深鉢)形土器 口径が胴径よりも大きく、深鉢形と呼んでもよい器形である。口縁部はなだらかに外反し口縁端は外側へ折り丸めて厚くしたものが多い。口縁を外方へ折り曲げたものもある。次の2類に分類されている。

第1類 器体外面を歯の緻密な櫛状器具による条痕を残して仕上げたもの。

第2類 器体外面を平滑に仕上げたもの。

397～423は第1類の口縁部である。397の口縁部の内外面には篋描鋸歯文がめぐらされ、397・400は口端に押引文が巡らされている。

上記の他に丹彩壺形土器の存在が知られているが今回は出土していない。163は赤彩であるがA類a) 構図をもつ。

(2) 下層第1様式亜式(挿図第43の424～432)

下層第1様式亜式は424～432で、壺形土器の胴部である。文様はつぎのa)～f)に分類されている。

a) 腹部文様帯の地文をなす横位の条線を施す櫛状器具の歯並びの間隔が少し広がる。

b) 文様帯の上下を劃する篋描横線を省略することが多くなり、文様帯間を研磨することをやめて単なる無文のまま放置する。

c) 地文の幅広い櫛描横線帯を数列に分離した幅の狭い横線帯にかえたり、後から篋または櫛で描き加える連弧文が省略される。

d) 文様帯の下端に櫛描波文や、上弦と下弦の連弧文を組み合わせた波状文様を配したもの。

e) 磨消線によって斜格文を描いたもの。

f) 肩部文様帯に複合鋸歯文を施したもの。

424～432の全てにa)の傾向が認められる。426・430にはd類文様が描かれている。

(3) 中層第1様式(挿図第43の433～第44の457)

壺形土器 下腹部の張った器体に、太い頸部と大きく外反した広い口縁部を設けてある。下層第1様式の伝統を受けて肩部が下方にくびれを作って膨らんでいるものがお見られる。次の2類に分類されている。

第1類 口唇部に篋による刺突文、櫛による押引文、アナガラ属の貝殻の腹縁による刻みを加えたものと、無文のものがある。

第2類 口唇部の3～4ヶ所に数個1組の圧痕を加えてある。

受口壺形土器 下層第1様式のそれに比べると、口辺部は萎縮している。口縁に斜格文を配したものの。口縁に斜線列、頸部に斜格文を配したものの。無文の口縁の先端に刺突文列、頸部に擬上文を加えたものなどがある。

細頸壺形土器 口縁部の形態によって次の2類に分類されている。

第1類 小型で、下腹部が張った器体に、短い口頸部を付け、口辺部は頸部よりも薄作りになっているものが多い。

第2類 口縁部をわずかな幅ながら上方へ折り曲げて受け口にしたものである。口頸部の作りが薄手のもの(a類)と、やや厚ぼったいもの(b類)とがある。

壺形土器の胴部文様は次の14種類の単位文様に分類されている。

- 1) 斜格文 単独で用いたものと幾種類かの文様の組合せからなる意匠の一部分をなすもの
- 2) 斜線帯 篋描きと櫛描き
- 3) 複合鋸歯文 上下を篋描線で区切る
- 4) 連弧文 櫛描き・篋描き・二又器具描きがある
- 5) 篋で幅狭い平行線をひき、その平行線内に篋による刺突文列、半割竹管による爪形文・櫛日文・アナガラ属の貝殻の腹縁による圧痕列を加えたもの
- 6) 櫛で曲線図形を描き、その上面にアナガラ属の貝殻の腹縁による刻み列を加えたもの
- 7) 縦位の櫛描直線
- 8) 縦位の櫛描波線
- 9) 横位の櫛描波線
 - a) 縦位の櫛描波文と同手法の緻密な波文を横位に描いたもの
 - b) 中層第2様式に一般化する中位の大きさの波文
 - c) 振幅と波長の著しく大きな波文
- 10) 篋描波文 速描きに描かれたものと、ゆっくり描かれたもの
- 11) 櫛描横線帯
 - a) 幅狭い櫛描横線を頸部から腹部にわたって、幾列も単純に描いたもの
 - b) 重列横線帯のところどころに、篋または櫛により縦位の切断線を加えたもの
 - c) 重列櫛描横線帯のところどころを、篋描きの長い直線または波文で区分することくに切断したもの
 - d) 流水文を形成するもの

- e) 歯先が2本ずつ組になった櫛状器具を用いて、器面に多数の横線列を重ね加えたもの
- f) やや幅の広い櫛描横線帯を描き、これに櫛描斜線を間隔をおきつつ加えたもの

12) 磨消線と研磨帯

13) 横位の櫛描断続線

14) 篋・二又器具による縦位の点列・断続線

433～455は壺形土器の上胴部である。433は1)の斜格文と4)の連弧文、434～440・442・433は4)の連弧文と11)の櫛描横線である。444・449は4)の二重連弧文の内部に6)の貝の腹縁による刻目を、445～446には5)の篋描平行線の内部に刺突文や圧痕を加えている。441は11)と連弧文状の9)の組合せである。

壺形土器 形態と装飾のしかたにより、次の3類に分類されている。

第1類 下層第1様式の伝統をうけ継いだもので、深鉢形ともよぶう形態である。

第2類 口縁部がくの字形に外反し、胴部が張った典型的な壺形もあるが、深鉢形にちかいものも多い。

第3類 深鉢形で外反する口縁部を厚手に作り、その口唇部に局部的に5個1組の圧痕を加える。

456は第1類、457は第2類の口縁部である。

上記の器種の他に丹形壺形土器・無頸壺形土器・器台形土器の存在が知られているが、今回は出土しなかった。

(4) 中層第2様式 (挿図第44の458～第45の504)

壺形土器 腹部の強く張った器体に、なだらかに弧を描いて外反したもので、形態と文様によって3類に分類されている。

第1類 腹部が角張って算盤玉のような形をしており、口唇部はいくらか拉張されて面を平らに切っている。甲類文様が施されているのが通例である。

第2類 胴部は丸く膨らんで球形に近い形をしており、口唇部は斜めに切られている。乙類文様が施されている。

第3類 口唇部は丸みを帯びて無文、頸部には篋描放射線状撥上文を加えたもの。口唇に竹管による円文、頸部に櫛描横線をめぐらしたものがある。

464・465・469・470は壺形土器第1類の口唇部、467は壺形土器第2類の口縁部である。

受口壺形土器 外方へなだらかに開いた口縁部の端を上向きに折り曲げて受口としてある。形態と文様の加え方によって2類に類別されている。

第1類 口縁部を急角度に折曲げて、垂直に上方へ立たせ、その外面に2条ないし4条の凹線をめぐらす。

第2類 口縁部をわずかに屈曲して上方に向かわせ、口唇には篋またはアナグラ属の貝殻の腹縁による刻みが加えられる。

460は第1類の口縁部で、458・459・461は第2類の口縁部である。

細頸壺形土器 口辺部の形態によって3類に分類されている。

第1類 口縁部を強く内彎させて半球形に作り、口縁部外面には数条の凹線をめぐらす。

第2類 口縁部をわずかに上方へ折曲げて受け口とし、そこに緻密な櫛描波文をめぐらす。

第3類 簡単な外開きの口縁部で、頸部には櫛描横線をめぐらす。

462・463・466は第1類の口縁部である。468・471～496は壺形土器の上胴部である。

高環形土器 坏部の形態によって2種類に分類されている。

第1類 半球形の浅鉢形の坏部に、透かし孔のない筒状の脚を附けた形態で、坏部の口縁部には2条ないし4条の凹線をめぐらす。

第2類 浅い円錐形に近い形をした皿状の坏部に、幅3cm内外の鐙状の水平線を設け、その外端をやや厚くして、そこに2～3条の凹線をめぐらす。

497～499は第1類の口縁部で、497は赤彩である。500～502は脚部で、591は柱状部が中空に、590・592は中実で作られている。

甕形土器 形態によって3種類に分類されている。

第1類 口辺部が外方へ大きく弧を描いて彎曲し口径が腹径よりも大きく、口唇には圧痕列が加えられている。

第2類 口縁部を短く外反せしめ、口径が腹径よりも大きく深鉢形に近い形態である。

第3類 腹径が口径よりも大きく、頸部でやや強くくびれた後、急角度に口辺部を外反せしめている。口唇部がわずかに肥厚せしめられ、甕または櫛状器具による刻みが加えられているものが多い。

503・504は第3類の口縁部である。

(5) 上層第1様式(挿図第46の505～第47の556)

壺形土器 球形の器体に大きく外方へ開いた口頭部がついてあり、次の3類に分類されている。

第1類 装飾を施すため口唇部をやや厚くしたもの。

第2類 口唇部を下方へ伸ばし拡げて幅広い装飾帯を作り出したもの。

第3類 口唇を肥厚せしめず口頭部の作りが簡単なもの。

505・506・508・509・514・516は第1類の口縁部、507・510・511は第2類の口縁部、512・513・515・517は第3類の口縁部である。518～521は突帯を巡らした頸部である。522～537は上胴部である。

赤彩壺形土器 球形の器体に丈の短い口辺部がつく。上腹部には櫛描きの横線・波文・簾状文などが配される。

114と191(巻頭図版第2の2・4)がある。191は2条の突帯の間に赤彩を加えている。

高環形土器 次のように2類に分類されている。

第1類 盤状の坏部に、たけの高い脚をつけたものである。

A類 外反りの口辺部が襷を作って下底に接続した盤状の坏部に、たけが高く上部は中実の柱状をなし、次第に裾で広がる脚をそなえた形態である。

B類 口辺部が厚手に作られ、A類にくらべると幅が狭く、直角に屈折せしめられて、垂直にたっている。

第2類 半球形の坏部に、たけの低い外反り円錐形の脚をつけたものである。

538・539・540は第1類A類の口縁部。541・542は第1類B類の口縁部である。543・544は1類の胸部である。

鉢形土器 次の3類に分類されている。

第1類 半球形の器体で、口縁部が段をなして肥厚せしめられているものと、内彎する口縁部の下方にわずかなくびれを作って、口縁部が段をなした感じをもたせたものがある。

第2類 半球形の器体で、器面に刷毛目を残して仕上げ、口辺部だけ研磨してその刷毛目を磨消してあるもの。

第3類 口辺部を急角度に外反せしめ、甕形土器のそれにやや類似している。

545は第2類の口縁部で、口縁部に縄文帯しを巡らしている。546～547は鉢形土器第1類のうち、縁部を内彎させたものである。

甕形土器 胴の張った器体にくの字形に外反した口辺部を付け、底部には低い台を付加したものが多く、口縁端に刻みを加えたものと、無文のものがある。

549～555は口縁部～上胴部である。

(6) 上層第2様式(挿図第48の557～第49の599)

壺形土器 球形の器体に、八の字に開いた、たけの低い口頸部をつけたものである。

558は口頸部、559は上胴部である。

赤彩壺形土器 パレススタイルと呼ばれている壺形土器で、口端外面と口頸部内面に赤彩を施している。

556は口縁部。560は上胴部で、描線と範描鋸歯文が加えられている。第3様式の可能性もある。

小型壺形土器 小型で無文である。次の3類に分類されている。

第1類 球形の胴部に八の字に開いた低い口頸部を付けたもの。

第2類 扁球形の胴部に、やや長い口頸部を付けたもの。

第3類 はなはだ小型で粗製のもの。

557は小型壺形土器第1類の口頸部である。

瓢形壺形土器 瓢の頭を切った形に似ており、口頸部はたけが長く内彎し、口唇部は内側が斜めに面取りされている。

561・564・565は口縁部、562・563・566・567は胴部である。

埴形土器 いずれも小型である。器形によって次の3類に分類できる。

第1類 口辺部が単純に内彎するもの。

第2類 口径と底径の差が少なく、筒に近い器形をもつもの。

第3類 高台状に底の周辺を高めたもの。

569・586・587は第1類、588・589は第2類、568は第3類である。

短頸広口壺形土器 扁球形の器体に短い口頸部をつけたもので、口辺部が内彎したものと外反したものがあ。40(SB-11出土)である。

高坏形土器 形態によって2類に分類されている。

第1類 半球形の坏部に、外反り円錐形で透かし孔3個を設けた脚をもつもの。

第2類 坏部が深くて下底を後作って口縁が大きく開き、透かし孔3～4個を設けた円錐形の脚を附けたもの。

570・571は第2類の坏部、572～577は第2類の脚部。578は第1類の坏部、579は完器、580～585は第1類の脚部である。

甕形土器 口縁部の形態によって3種類に分類されている。

第1類 口辺部が外反するもので、口唇部に刻みを加えたものと、それを加えてないものがある。

第2類 口辺部が内彎するもので、口縁外面と肩部に圧痕列を加えたものがある。

a類 口縁部がゆるやかに内彎するもの。

b類 口縁部が上方に折れ曲がったもの。

第3類 口頸部がS字状に二段にくびれたもので、口縁部外面に圧痕列を加えたものもある。

591～594は第2類のb類で、口縁部が垂直に立ち上がるものである。590は第3類で、口径と段の径がほぼ等しいものである。595は複合口縁甕形土器の口縁で、第3様式である可能性もある。596～598は脚台である。

存在が知られている台付壺形土器・蓋形土器・手焙形土器は今回出土しなかった。

(7) 上層第3様式(挿図第50の600～第51の636)

壺形土器 599～603は壺形土器第2類の口縁部で、いわゆる柳ヶ坪型壺系のうち複合口縁でないものである。603は口端が肥厚せず、羽状圧痕も口端のみに施文されており、やはり柳ヶ坪型であろう。

赤彩壺形土器 608・609はパレススタイルの上胴部で、櫛描横線・篋描鋸歯文・圧痕列・赤彩等が施されている。

複合口縁壺形土器 604・605は複合口縁壺形土器の口縁部である。604は稜の上側に小型の環状貼付文を、605は稜部に斜位の短線列を巡らしている。

小型長頸壺形土器 606は下胴部の張った扁平な体部を持つ。口頸部を欠いているが、上胴部の正対する位置に各1個の小孔が焼成後に穿たれている。現状は無頸壺であるが、口縁部の状態と焼成後穿孔からみて小型長頸壺の再利用と推測される。

蓋形土器 609は低い山形をなすが、頂部は欠失して不明である。上面には中心部から外方に向かって赤彩・圧痕列・櫛描線・加彩篋描鋸歯文・櫛描線を環状にめぐらせている。下面には大きなカエリをめぐらし、側面と下面全体に赤彩を加えている。

高坏形土器 第2様式の伝統をうけた第1類と第2類に第3類が加わる。

611～613は第2類の脚部で、何れも円孔が穿たれ、611櫛描横線が加えられている。610は第2類の坏部、614・615は第2類の脚部で、615には櫛描横線が加えられている。

甕形土器 第2様式の伝統をうけた第1類～3類に分類できる。

第1類 口辺部が外反するもの。

第2類 口辺部が内彎して、受口になるもの。

第3類 口頸部がS字状に二段にくびれたもの。

a類 口唇部が上方に立ち上がるもの。

b類 口唇部が外反するもの。

627～636は口縁が外反する第1類の口縁部～上胴部である。623・624は受口状口縁の第2類の口縁部である。616～622はS字口縁の第3類の口縁部である。616・618・620・621は口径と口縁部の段径がほぼ等しいB類、617・619・622は口唇が外反するb類である。625・626は甕形土器の脚台で、625はS字口縁甕の台であろう。

器台形土器 306は受部の口辺部であろう。全体の器形は明らかでない。

(8) 平安朝土器 (挿図第51の637～658・第52の659～661)

碗 637～658は口縁部と底部である。638には灰釉が漬釉されている。642は無台碗である。

鉢 659は底部である。

甕 692は胴部で、外面に条痕状の叩き板痕、内面に青海波状の当具痕が残されている。

把手 661は把手であるが、本体は不明である。

その他 660は本体の形状は不明である。円形の剥離痕一対が残存する。

(9) 土師器 (挿図第52の663～666)

甕 663～666は口縁部である。

カワラケ 682は土師器のカワラケである。

(10) 行基焼 (挿図第52の667～686)

碗 667～685は第2～第3形式である。667～676は山茶碗、676は無台碗である。

鉢 677は高台を備えた底部である。

小皿 678～681は小皿で、高台をもつもの(678)、突出した平底をもつもの(679・680)、偏平底をもつもの(681・682)がある。

甕 683～685は胴部で、器表に格子文の叩き板痕が印されている。

第2節 第2トレンチの土器

1、遺構出土の土器

(1) 第1次調査

A、SK2a-1出土土器 (挿図第53の1～3)

1・2は下層第1様式の壺形土器の上胴部、3は中層第1様式の受口壺形土器の口頸部である。

B、SK2a-2出土土器 (挿図第53の4～15)

4～9は下層第1様式の壺形土器で、4は壺形土器の口縁部、5～9は上胴部である。10は中層第1様式の甕形土器の口縁部。11～13は上層第1様式の壺形土器の上胴部、14は甕形土器の脚台。15は上層第2様式の高環形土器第1類の脚端部である。

C、SK2a-3出土土器 (挿図第53の16～21)

16は下層第1様式の壺形土器の上胴部。17は中層第2様式の壺形土器の上胴部。21は甕形土器第2類の口縁部である。18～20は上層第1様式で、18・19は壺形土器の上胴部、20は甕形土器の口縁部である。

D、SK 2 a - 4 出土土器 (挿図第53の22~24)

22・23は下層第1様式の壺形土器の上胴部、24は上層第1様式の壺形土器の上胴部である。

E、SK 2 a - 5 出土土器 (挿図第53の25・26)

26は上層第2様式で高坏の脚頭部である。25は上層第3様式の高坏形土器第1類の口縁部である。

(2) 第2次調査

A、SK 2 b - 5 出土土器 (挿図第54の35)

35は上層第3様式の甕形土器第3類C類の口縁部である。

B、SK 2 b - 7 出土土器 (挿図第54の36・37)

36・37は下層第1様式の壺形土器の上胴部である。

C、SK 2 b - 9 出土土器 (挿図第54の38)

38は上層第2様式の甕形土器第1類の口縁部~上胴部である。

D、SK 2 b - 13 出土土器 (挿図第54の39)

39は上層第1様式の高坏形土器第1類A類の口縁部である。

E、SK 2 b - 14 出土土器 (挿図第54の40)

40は中層第2様式の細頸壺形土器第2類の口頸部である。

F、SK 2 b - 15 出土土器 (挿図第54の41~43)

41は中層第2様式の高坏形土器の脚部。42・43は上層第1様式で、42は高坏形土器第2類の脚部、43は甕形土器の口縁部~胴部である。

G、SK 2 b - 16 出土土器 (挿図第54の44・45)

44は中層第2様式の高坏形土器の脚部。45は上層第1様式の甕形土器の口縁部である。

H、SK 2 b - 20 出土土器 (挿図第54の46)

46は中層第2様式の甕形土器第3類の口縁部~上胴部である。

I、SB 2 b - 22 出土土器 (挿図第54の47~50)

47~50は下層第1様式の壺形土器の上胴部である。

J、SD 2 b - 1 出土土器 (挿図第54の51~第55の63)

51~53は下層第1様式の壺形土器の上胴部である。54~58は中層第2様式で、54は甕形土器の上胴部、55は鉢形土器の口縁部、56~58は甕形土器第3類の口縁部~胴部である。59~60は上層第1様式で、59は鉢形土器第2類の口縁部、60は高坏形土器第1類B類の口縁部である。61~63は上層第2様式で、63は脚付まり形土器の口縁部、61・62は高坏形土器で、61は第2類の脚部、62は第2類の口縁部である。

2、包含層出土の土器

(1) 第1次調査 (挿図第52の27~34)

A、下層第1様式

壺形土器 27は上胴部である。

B、中層第2様式

壺形土器 28~30は上胴部である。

甕形土器 31は第3類の口縁部である。

C、上層第1様式

壺形土器 32は上胴部、33は第3類の口縁部である。

D、上層第2様式

甕形土器 34は脚台部である。

(2) 第2次調査(挿図第55の64～第57の109)

A、下層第1様式

壺形土器 64・65は頸部、66～68は上胴部である。

B、中層第1様式

壺形土器 69は上胴部である。

C、中層第2様式

壺形土器 71・73・75～79・81～83は上胴部である。74・84・85は胴部から底部の形状が明らか
なもので、第1類である。

受口壺形土器 70・80は口縁部～上胴部で、ともに第1類である。

細頸壺形土器 72は頸部である。

小型壺形土器 86は受口口縁のミニチュア土器である。

高坏形土器 88は第1類の口縁部、87は第2類の口縁部、89は脚部である。

甕形土器 90は第1類の口縁部、91は第3類の口縁部である。

D、上層第1様式

壺形土器 94・96は第1類の口縁部、92・93は第2類の口縁部、95は第3類の口縁部である。97
は頸部～上胴部である。

小型壺形土器 98は口頸部を欠く胴部から底部である。

高坏形土器 99は第1類A類の口縁部、100・101・194は脚台部である。

甕形土器 102・103は口縁部～胴部である。

E、上層第2様式

脚付甕形土器 高坏形土器第1類に類似した器形であるが、口径が小さく、口辺部は内方へやや
つばまっている。2～63は口辺部である。

甕形土器 106・107は脚台部である。

F、行基焼

碗 108・109は第3形式である。

第3節 第3トレンチの土器

1、遺構出土の土器

(1) SK3-3出土土器(挿図第58の1～3)

1・2は中層第2様式の壺形土器で、1は受口壺形土器第1類の口縁部、2は上胴部である。3は上層第2様式の壺形土器上胴部である。

(2) SK3-4出土土器(挿図第58の4)

4は中層第2様式の壺形土器の上胴部である。

(3) SK3-5出土土器(挿図第58の5～9)

9は中層第2様式の甕形土器第2類の口縁部。5～7は上層第1様式で、5は壺形土器の口縁部、6は壺形土器第1類の上胴部、7は高坏形土器第1類の脚部である。8は上層第2様式の甕形土器第1類である。

(4) SK3-9出土土器(挿図第58の10・11)

10・11は上層第3様式で、10は赤彩壺形土器の完形品、11は高坏形土器第2類の完形品である。同一の遺構から出土した。両者の相互関係を示す好資料である。

(5) SK3-10出土土器(挿図第58の12～14)

12は中層第2様式の受口壺形土器第2類の口縁部である。13は上層第2様式の高坏形土器の脚部である。14は上層第3様式の高坏形土器第2類である。

(6) SK3-11出土土器(挿図第58の15～第59の18)

15は下層第1様式の壺形土器の上胴部。16～18は中層第2様式で、16は細頸壺形土器第2類の口縁部、17は壺形土器の上胴部である。18は甕形土器第1類の口縁部である。

(7) SK3-13出土土器(挿図第59の19・20)

19・20は中層第2様式の壺形土器の上胴部で、20には焼成前に穿孔された円意が存する。

(8) SK3-14出土土器(挿図第59の21～23)

21は下層第1様式の甕形土器第1類の口縁部。22・23は中層第2様式で、22は壺形土器の上胴部、23は甕形土器第2類の口縁部である。

(9) SK3-15出土土器(挿図第59の24)

24は中層第2様式の壺形土器の上胴部である。

(10) SK3-17出土土器(挿図第59の25～32)

25は中層第1様式の壺形土器の上胴部。26～28は中層第2様式で、26は受口壺形土器第2類の口縁部、27は高坏形土器の脚上部で赤彩、28は甕形土器第1類の口縁部～上胴部である。29・30は上層第1様式で、29は壺形土器第2類の口頸部、30は甕形土器の口縁部～上胴部。31・32は上層第3様式で、31は赤彩壺形土器の口縁部、32は高坏形土器第2類の完形品で、SK-17の時期を示すものであろう。

(11) SK3-18(挿図第60の46・47)

46は上層第1様式の壺形土器第1類の口縁部である。47は上層第3様式の赤彩壺形土器の口縁部～上胴部である。

(12) 拡SK3-1出土土器(挿図第59の33～45)

33～35は中層第1様式の壺形土器の上胴部。36～43は中層第2様式で、36～39は壺形土器の上胴部、40～43は甕形土器口縁部で、40・41は第1類、42は第2類、43は第3類であろうか。44は上層第1様式の甕形土器、45は上層第2様式の高坏形土器の脚頭部である。

2、包含層出土の土器（挿図第60の48～第75の352）

(1) 下層第1様式（挿図第60の48～53）

壺形土器 48～51は口縁部である。

細頸壺形土器 52は口縁部、53は上胴部である。

(2) 中層第1様式（挿図第60の54～66）

壺形土器 54・55・71は口縁部で、54は第1類？、55は口端にニナ類の貝殻を回転押捺した縄文状圧痕を加えた特殊なものである。56～70は上胴部で櫛描連弧文を配したものの、67・68はさらに櫛描横線帯を加えたものである。

甕形土器 71は第1類の口縁部である。

(3) 中層第2様式（挿図第60の70～第62の101）

壺形土器 75・77は第1類の口縁部、78～90・92・93は上胴部である。

受口壺形土器 72～74・76は第2類の口縁部である。

無頸壺形土器 91は口縁部で、櫛描横線を配し、円孔を穿っている。

高坏形土器 94は脚部で、赤彩である。

甕形土器 97は第1類の口縁部、101は第1類の甕形土器である。95・96・98～100は第3類の口縁部～上胴部である。

(4) 上層第1様式（挿図第62の102～第64の158）

壺形土器 102・103・105・112・113・116・119は第1類の口縁部、104・106・107～109は第2類の口縁部、110・111・114・115・117・118・120・121は第3類の口縁部である。122は両端を欠くが内面に横ミガキが施されており、壺形土器の口縁部として図示したが、器種・様式が変更する可能性もあり、類例をまちたい。123～148は壺形土器の上胴部～下胴部で、137は文様帯の下が赤彩である。

鉢形土器 149・150は第2類の口縁部である。149には縄文 $L < \frac{R}{R}$ が、150には櫛描横線が施されている。

高坏形土器 151・152は第1類A類の坏部と脚部である。

甕形土器 153～158は口頸部で、口唇部が無文のものと刻目列をめぐらしたものがある。

(5) 上層第2様式（挿図第64の159～第66の194）

壺形土器 162は完器である。159～161・163は口縁部で、159は口端に3本1組の棒状貼付文を配し、161・162は口唇部に刻みを加えている。160・163は無文である。168は下胴部～底部である。

小型壺形土器 164・165は胴部で、何れも無文である。

甕形土器 166は上胴部である。

赤彩壺形土器 167は上胴部である。

鉢形土器 169は口縁部がかかるく外反し、胴部の径が口径より少ない。

甕形土器 170は半球形の器形をもち、底部は中心部をくぼめて高台状に作られている。

高坏形土器 171・177～179は第2類で、171は坏部、177～179は脚部である。172は第1類で坏部から脚部である。173～176は脚頭部で類別は不明である。

器台形土器 180は受部が小さく、円錐形の脚に円孔が穿たれている。受部と脚の間が貫通している。器表にはミガキが施されている。

小型甕形土器 181は台付甕のミニチュアである。

甕形土器 182・183・185は第1類の口縁部。186・187は第2類の口縁部。188・189は有段口縁の口唇が上方を向く第3類a類の口縁部である。188の口縁後部には斜位の瓦痕列が巡らされている。190～192は上胴部、193・194は甕形土器の脚台である。

(6) 上層第3様式(挿図第67の195～第75の349)

壺形土器 口縁部の形状によって2類に分類できる。

第1類 口縁部が八の字形に外反するもの。

第2類 口端部を肥厚させ、口端や上面に施文したもの。

195・221は第1類で、195は頸部が短い筒状をなす。196は壺形土器第2類のいわゆる柳ヶ坪型土器系の口縁部である。214は上胴部で櫛描横線と寛描鋸歯文が施されているが丹彩はみられない。

複合口縁壺形土器 197は口縁部に稜をつくり、口縁が大きく外反する。頸部は筒状に作られ、突帯を巡らしている。

長頸壺形土器 198～204・206は口縁部である。204は内外面ともに赤彩で、胎土も灰白色である。

小型短頸壺形土器 205・207～209は口縁部～上胴部で、214は壺形土器の口縁部である。209は胴部外面にハケメが加えられている。

赤彩壺形土器 口縁部の形状によって2類に分類できる。

第1類 口端部を肥厚させ、口端や上面に施文したもの。

第2類 口縁部が薄く鐮状に作られ、口端および上面に施文したもの。

211は第1類の口頸部で、口端に鋸歯文と棒状貼付文を、口縁上面に羽状文と円錐状貼付文を配している。213は第2類の口頸部で、上面にめぐらした突帯の内側に鋸歯文が施されている。215～222は類別不明であるが、上胴部から底部で櫛描横線と加彩寛描鋸歯文と文様帯の下方に丹彩を加えている。

小型鉢形土器 223は口縁部が内彎する器形で、外面に褐色の化粧掛けが施され赤彩にみえる。

小型埴形土器 器形によって2類に分類される。

第1類 立ちが高く、口縁部が外反するもの。

第2類 口縁部がかかる内彎するもの。

224・225は第1類。226は第2類である。

器台形土器 器形によって2類に分類される。

第1類 先行様式の伝統を引く器形で、小さな皿状の受部に外反りの円錐形の脚が付くもの。

第2類 稜をもつ大きな環状の受部に外反り円錐形の脚が付くもので、多孔で鼓形器台に類似した器形をもつもの。

230・231は第1類で、受部と脚内部の間は中実である。231の脚には円孔が穿たれている。227～229は第2類で、大型で坏部・脚部ともに2段に穿たれた円孔と突帯で飾られている。

高坏形土器 上層第2様式の第1類・第2類系に新しい器形が加わって4類に分類される。

第3類 坏部が碗形の体部と大きく外反する口縁部からなるもの。

第4類 小ぶりの碗形の坏部に裾が大きく開いた外反り円錐形の脚が付くもの。

232・233～241は第2類で、235～241は坏部である。242は坏部の口縁部が段をなして外反している第3類である。234は第4類の坏部で、外面に櫛溝横線と篋描鋸歯文を交互に施文している。243～254は脚部で、円孔が穿たれたものと円孔がないものがある。

鉢形土器 288～291は口縁部である。口縁が内彎してほぼ垂直に立ち上がり、胴部の径が口径に近い。底部を明らかにする資料に恵まれない。

甕形土器 新たに第4類が加わる。頸部との間に稜をつくり、かるく開く幅のひろい口縁部をもつもので、292・303がそれである。

255～264・267～284は口縁部が外反する第1類の口縁部～胴部で、263は完器である。265・266・285～287は口縁が内彎する第2類、296～302・304～307は第3類a類である。308～326は第3類b類の口縁部～上胴部である。332～349は甕形土器の台部で、316のように脚端を内側に折り曲げたものと折り曲げないものがある。

(7) 行基焼 (挿図第75の350～352)

山茶碗 350～352は第2型式の口縁部と底部である。

第4節 第1グリッドの土器

1、遺構出土の土器

(1) SK1G-1 出土土器 (挿図第76の1・2)

1は中層第2様式の壺形土器の上胴部。2は上層第2様式の高坏形土器第2類の口縁部である。

(2) SK1G-2 出土土器 (挿図第76の3)

3は中層第1様式の受口壺形土器の口縁部で赤彩である。

(3) SK1G-3 出土土器 (挿図第76の4)

4は上層第2様式の壺形土器の上胴部である。

(4) SK1G-5 出土土器 (挿図第76の5)

5は中層第2様式の甕形土器第3類の口縁部～上胴部である。

(5) SD1G-7 出土土器 (挿図第76の6～10)

6～9は中層第2様式の壺形土器で、6は第3類の口縁部、7は第1類の口縁部、8・9は上胴部である。10は上層第2様式の高坏形土器第2類の口縁部である。

2、包含層出土の土器 (挿図第76の11～33)

(1) 下層第1様式

壺形土器 11・12は、ともに上胴部である。

(2) 中層第1様式

壺形土器 13・14は、ともに上胴部である。

(3) 中層第2様式

壺形土器 17～19は上胴部である。

受口壺形土器 15・16は第2類の口縁部である。

高坏形土器 21は中実で柱状の脚部である。

甕形土器 22は第1類の口縁部である。

(4) 上層第1様式

壺形土器 23・24は第2類の口縁部、25は上胴部で赤彩である。

高坏形土器 26は第1類の脚部、27は第1類B類の口縁部であろうか。

脚付盃形土器 20は盃形土器の口縁部である。

甕形土器 28は口縁部である。

(5) 上層第2様式

小型碗形土器 30は口縁部が内彎するものである。

高坏形土器 29・31・32は脚部である。29は無文、31は縄描横線と円孔、32には縄描横線が施されている。

(6) 行基焼

山茶碗 33は第3形式の底部である。

第5節 第2グリッドの土器

1、遺構出土の土器

(1) SB2G-1出土土器(挿図第77の1)

1は中層第2様式の受口壺形土器第2類の口縁部である。

(2) SK2G-2出土土器(挿図第77の2・3)

2・3は中層第2様式の壺形土器の上胴部である。

(3) SK2G-3出土土器(挿図第77の4)

4は中層第2様式の甕形土器第1類口縁部である。

(4) SK2G-4出土土器(挿図第77の5～9)

5～7は中層第2様式の甕形土器で、5は第2類の口縁部、6・7は第3類の口縁部である。8は上層第1様式の壺形土器の口縁部、9は上層第2様式の壺形土器第2類の口縁部である。

(5) SK2G-5出土土器(挿図第77の10～17)

10・11は中層第1様式の壺形土器の上胴部。12～15・17は中層第2様式で、12～14・17は壺形土器上胴部、15は高坏形土器第1類の口縁部。16は上層第1様式の壺形土器の頸部である。

2、包含層出土の土器(挿図第77の18～25)

(1) 中層第2様式

壺形土器 18は上胴部である。

甕形土器 19・20は第1類の口縁部、24は第3類の口縁部であろう。

(2) 上層第1様式

壺形土器 21は第2類の口縁部である。

甕形土器 22・24は口縁部である。

(3) 平安朝様式土師器

甕形土器 25は内彎する口縁部で、23は脚台である。

第6節 第3グリッドの土器

1、遺構出土の土器

(1) SK3G-1 出土土器 (挿図第78の1～4)

1・2は上層第1様式で、1は壺形土器第2類の口縁部、2は甕形土器の口縁部。3・4は上層第2様式の高坏形土器第2類の脚部である。

(2) SK3G-3 出土土器 (挿図第78の5～14)

5は中層第1様式の壺形土器の上胴部。6は中層第2様式の壺形土器上胴部。7～9は上層第1様式の壺形土器で、7は第1類の口縁部、8は胴部～底部、9は底部である。10は上層第2様式の高坏形土器第2類の口縁部。11～14は上層第3様式で、11・12は高坏形土器第2類の口縁部と脚端部、13・14は甕形土器第1類口縁部である。

(3) SK3G-4 出土土器 (挿図第78の15～第80の35)

15～17は中層第2様式で、15は細頸壺形土器第2類の口縁部、16は甕形土器第1類の口縁部、17は第2類の口縁部である。18～20は上層第1様式の壺形土器で、18・19は第1類の口縁部、20は上胴部である。24～26は上層第2様式の高坏形土器第2類の口縁部である。22・23・27～34は上層第3様式で、22・23は甕形土器の口縁部と底部、27は高坏形土器第2類の脚部、28～35は甕形土器で、28～31・33～35は第1類の口縁部、32は第2類の口縁部である。

(4) SD3G-5 出土土器 (挿図第80の36～第82の82)

36は下層第1様式壺形土器の上胴部。37～44は中層第1様式で、37～43は壺形土器の上胴部、44は深鉢形土器口縁部である。45・46は中層第2様式の壺形土器で、45は第3類の口縁部、46は上胴部である。47～53は上層第1様式である。48は壺形土器第1類、47・49～51は上胴部、52は外来系の受口壺形土器で、口縁部に3本一組の棒状貼付文が加えられている。53は甕形土器の口縁部である。54～59・61～67・69～70は上層第2様式である。54・59は壺形土器の口縁部と胴底部、55～58は甕形土器の口縁部と胴底部、61は鉢形土器の口縁部。62～67・69は高坏形土器第2類、70は第2類である。52・60は上層第2～第3様式であろうか。52は28cm前後の口径をもつ壺形土器で、内彎した口縁部に縦位の棒状貼付文を加えている。60は小型甕形土器である。68・71～82は上層第3様式で68・71・72は高坏形土器第2類、73～78・80～82は甕形土器で、73～78は第1類の口縁部～上胴部、80は第2類

の口縁部～上胴部、79は鉢形土器の口縁部である。

(5) S D 3 G - 6 出土土器 (挿図第83の83～105)

83～90は中層第2様式で、83は受口壺形土器第2類、85は短頸壺形土器、84・86は壺形土器、88・89は高環形土器で、89は第1類である。90は甕形土器第1類である。91～99は上層第1様式の壺形土器で、91は第1類、92は第2類、93は第3類である。100～102は上層第2様式で、100・101は甕形壺形土器、102は甕形土器第3類A類。103～105は上層第3様式で、103は壺形土器第2類、104は高環形土器、105は甕形土器第1類である。

2、包含層出土の土器 (挿図第84の106～第85の148)

(1) 中層第1様式

壺形土器 106～119は上胴部である。

(2) 中層第2様式

壺形土器 120～124は上胴部である。

高環形土器 125は脚部である。

甕形土器 126・127は第1類の口縁部、128は第2類の口縁部である。

(3) 上層第1様式

壺形土器 129は第3類の口縁部、131は第2類の口縁部である。

鉢形土器 134は第3類の口縁部である。

高環形土器 130は第1類の坏部である。135は第2類の脚部である。

(4) 上層第2様式

高環形土器 136・137は何れも脚部で、類別は明らかでない。

(5) 上層第3様式

小型壺形土器 138は頸部～上胴部である。

高環形土器 139は第2類の口縁部、140～143は脚部で、類別は明らかでない。

甕形土器 144・145は第1類の口縁部、146は第3類の口縁部である。

(6) 平安朝瓦器

碗 149は口縁部である。

第7節 第4グリッドの土器

1、遺構出土の土器

(1) S D - 1 出土土器 (挿図第86の1～20)

1・2は中層第1様式の壺形土器の上胴部。3～9は中層第2様式で、3～8は壺形土器の上胴部、9は受口壺形土器第2類の口縁部である。10～16は上層第1様式である。10～14は壺形土器で、10は第1類の口縁部、11は第3類の口縁部。15・16は高環形土器で、15は第1類B類の口縁部、16は第

1 類の脚部。17は上層第1 様式? の甕形土器か鉢形土器の口縁部である。18は上層第2 様式の脚付盃形土器である。19・20は埋土上部から出土したもので、19は上層第3 様式の高坏形土器の脚部、20は上層第3 様式台付甕形土器の脚部である。

第8節 表採土器

1、弥生式土器（挿図第87の1～3）

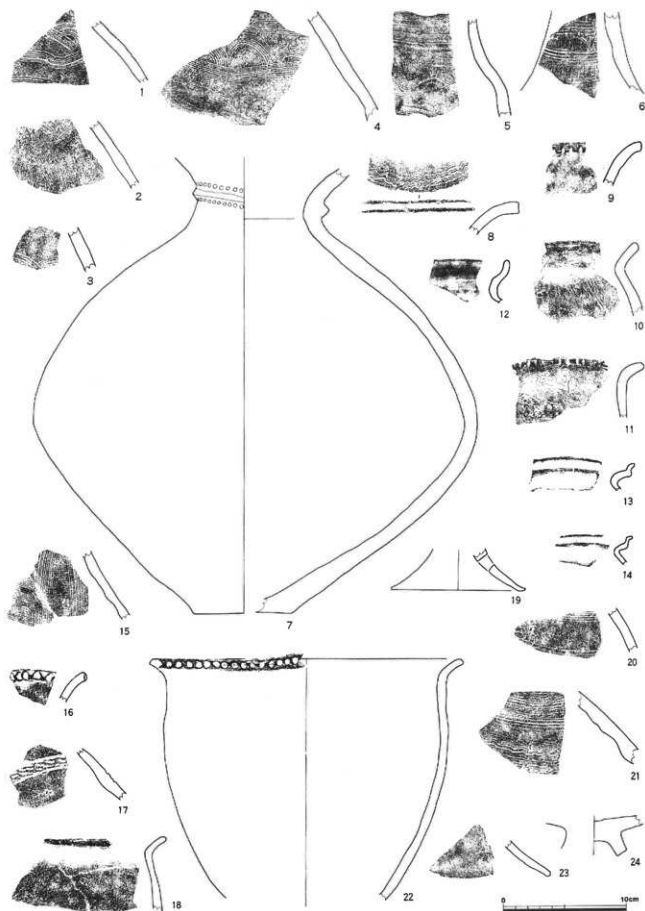
1 は伊藤憲氏が江川の河底において採集したもので、二反地式土器系の甕形土器の口頸部である。

2 は史蹟指定地の南側を流れる水路の改修工事の際に採集されたもので、上層第3 様式の壺形土器の上胴部である。

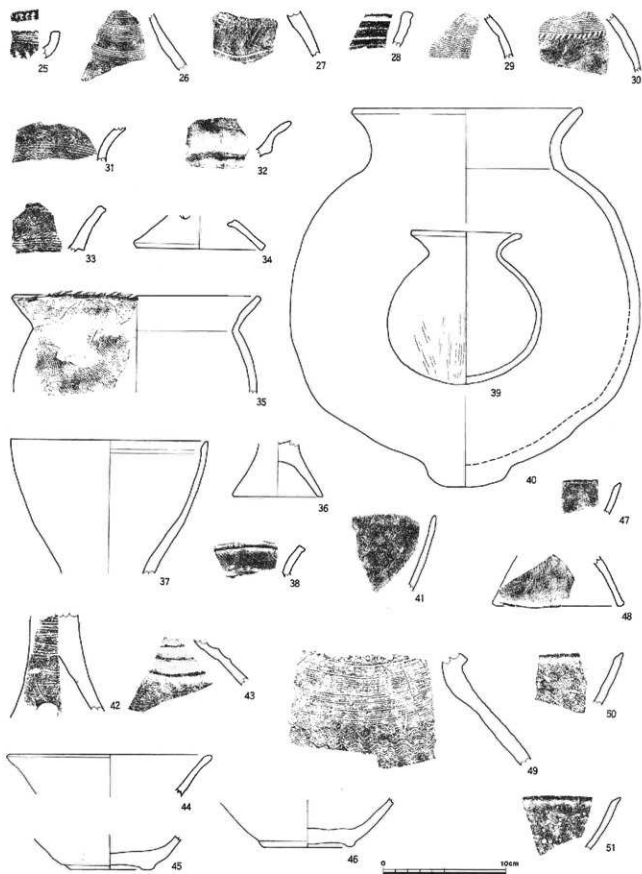
3 は2とともに採集されたもので、上層第1 様式の高坏形土器第1 類A類の口縁部で、外来系土器であろうか。

2、中世の土器（挿図第87の4～18）

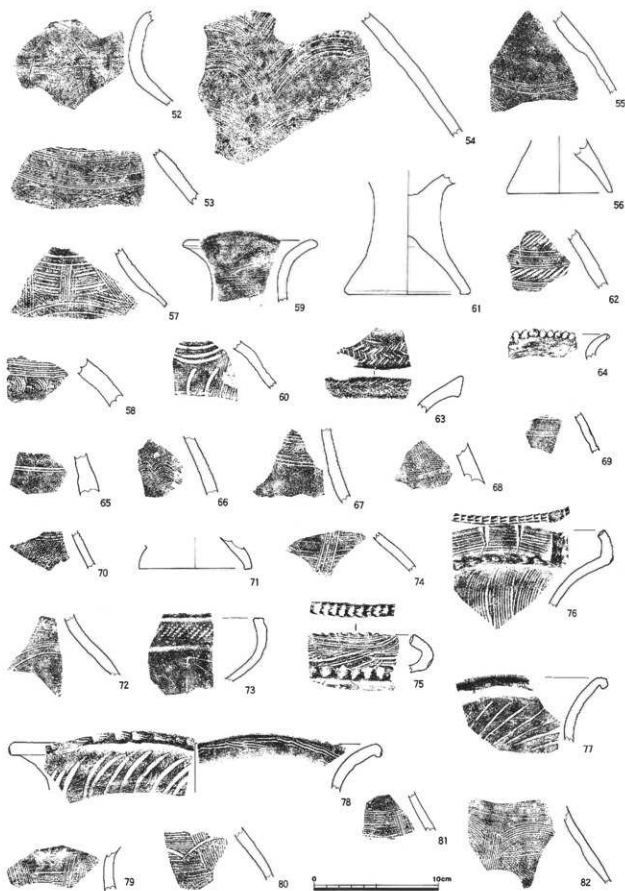
すべて史蹟指定地の南側を流れる水路の改修工事の際に採集されたものである。4～15は行基焼第2 型式～第3 型式の山茶碗の口縁部～底部、16は行基焼の壺の上胴部、17・18は行基焼の甕の上胴部である。19は名称・用途ともに不明であるが、棒状の脚部ではなかろうか。



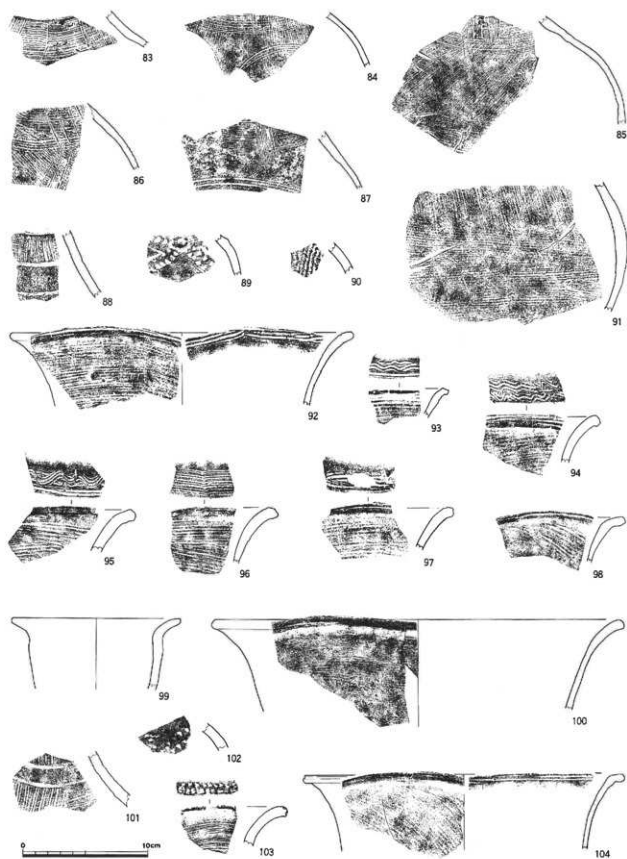
挿図第26 第1トレンチ遺構出土 土器実測図(1)



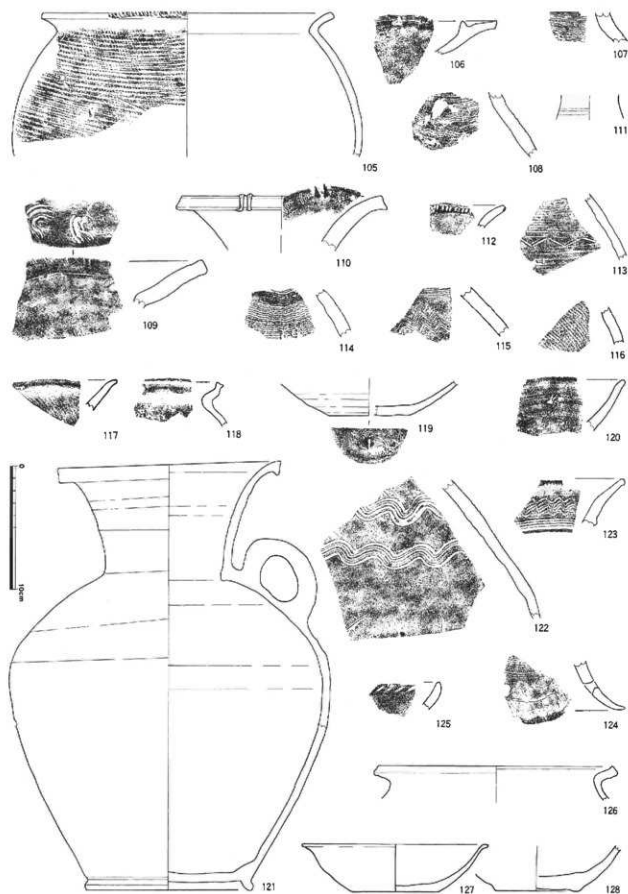
挿図第27 第1トレンチ遺構出土 土器実測図(2) 43は赤彩



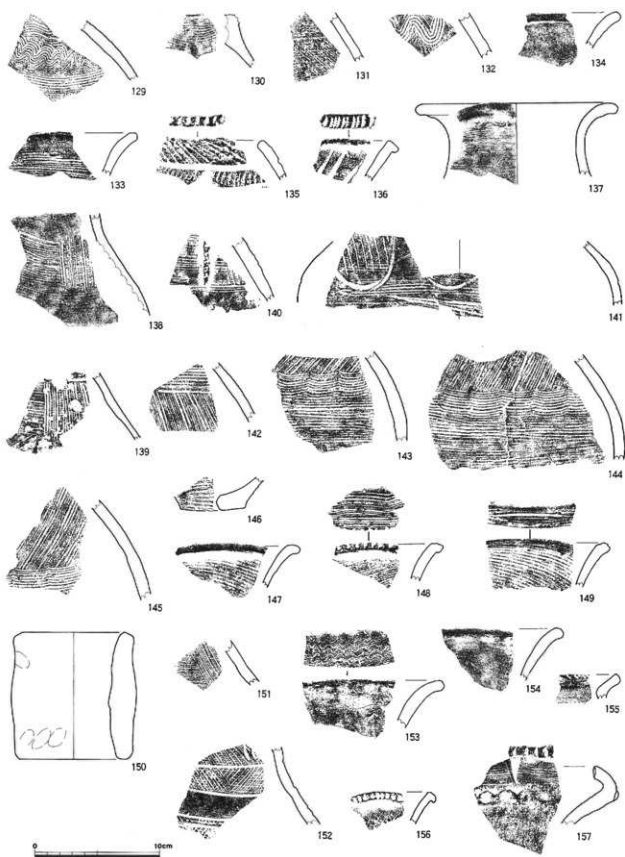
挿図第28 第1トレンチ遺構出土 土器実測図 (3)



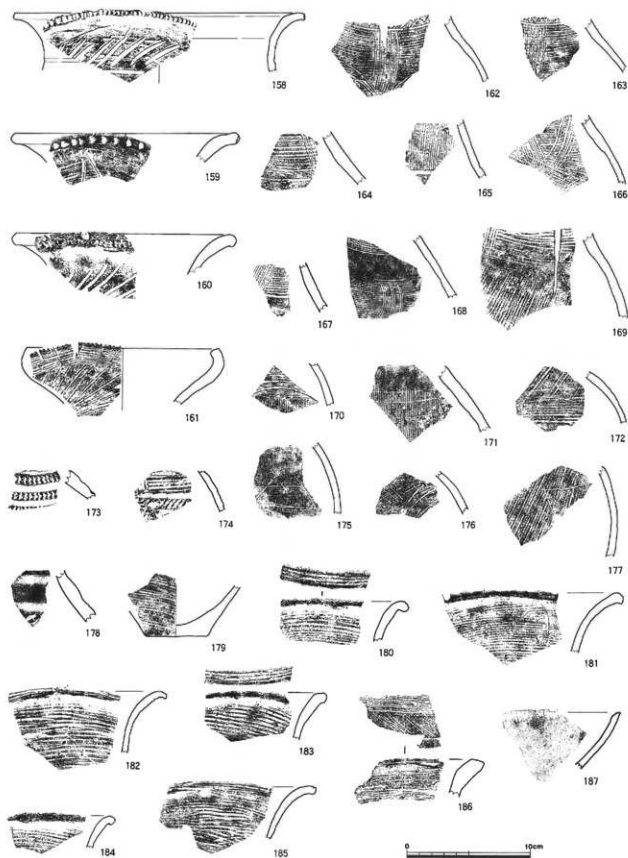
挿図第29 第1トレンチ遺構出土 土器実測図(4)



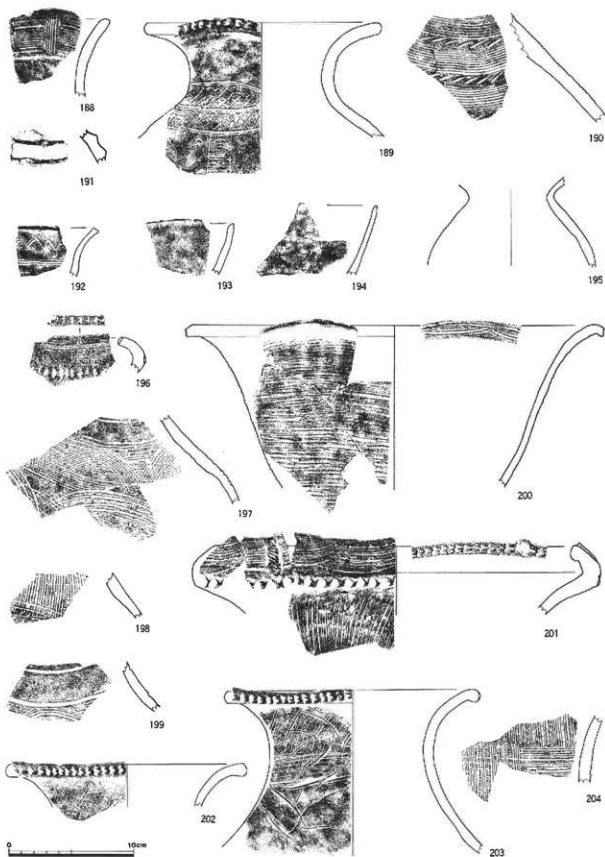
挿図第30 第1トレンチ遺構出土 土器実測図(5) 114は赤彩



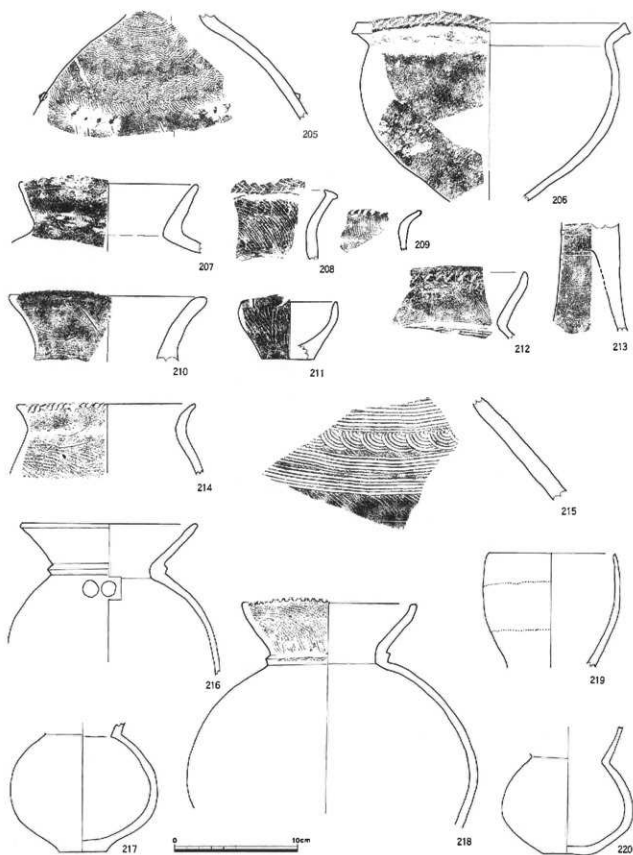
挿図第31 第1トレンチ遺構出土 土器実測図 (6)



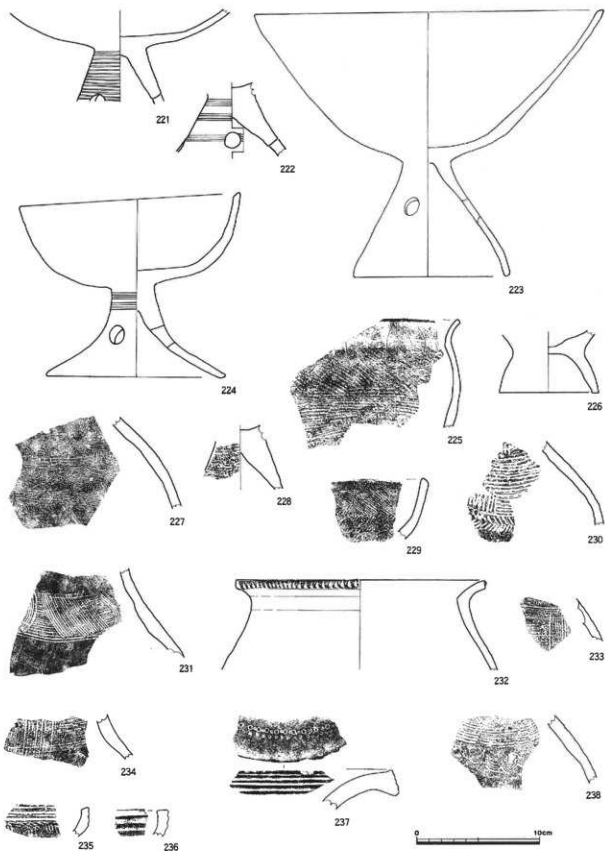
挿図第32 第1トレンチ遺構出土 土器実測図(7) 163は赤彩



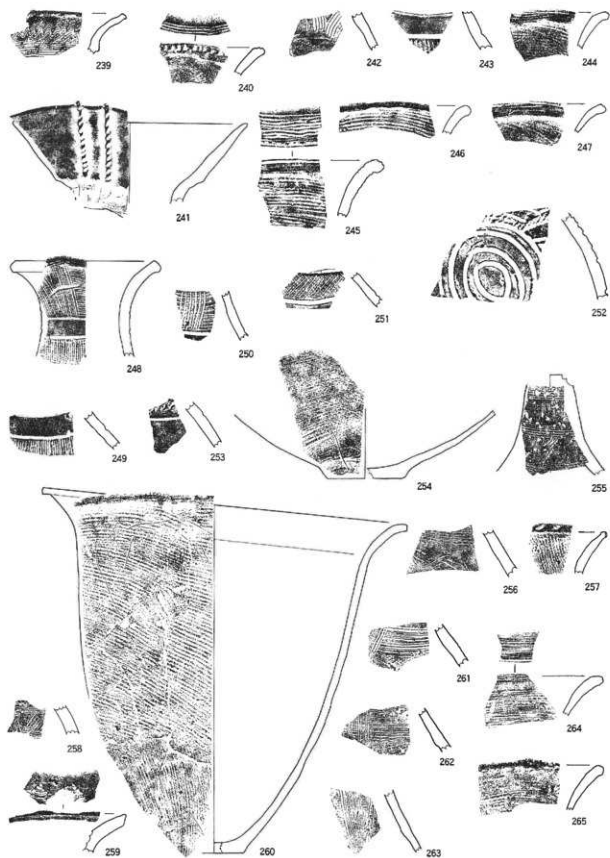
挿図第33 第1トレンチ遺構出土 土器実測図(8) 191は赤彩



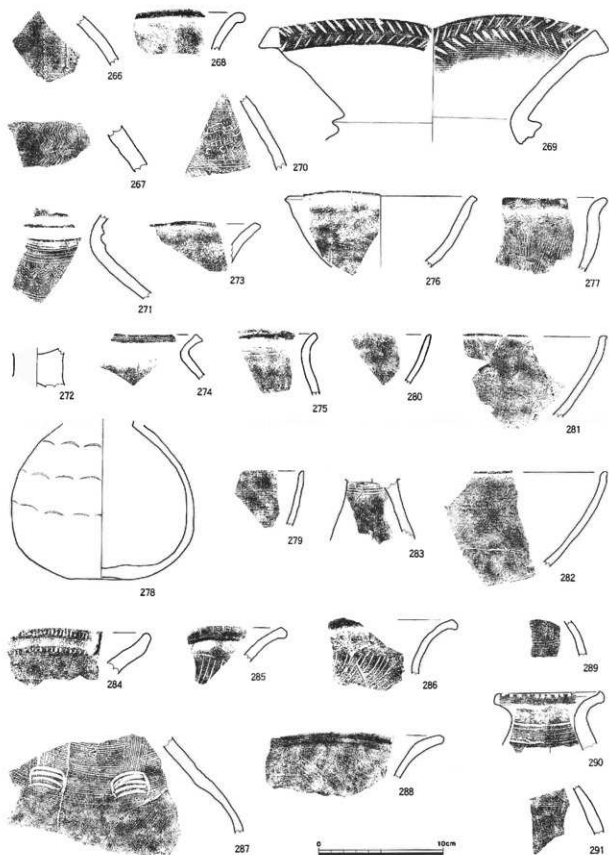
挿図第34 第1トレンチ遺構出土 土器実測図 (9)



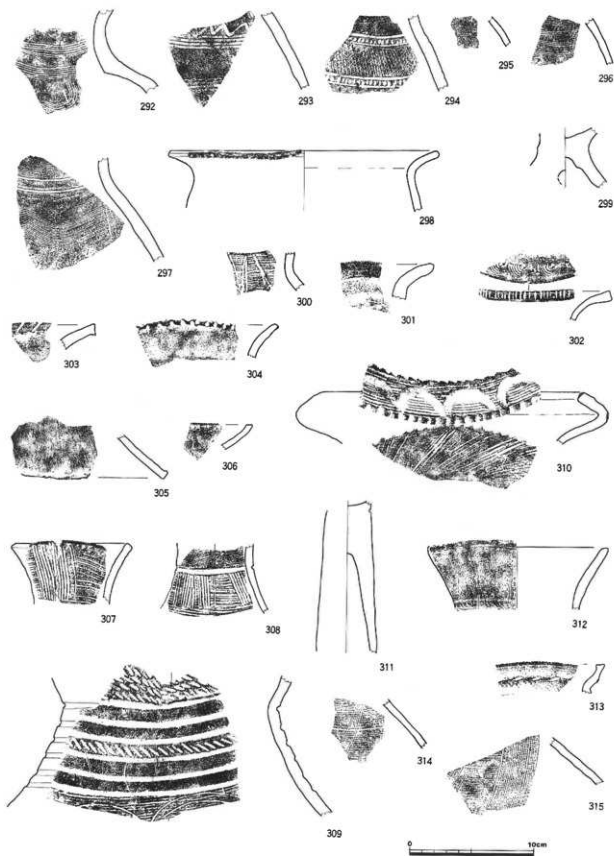
挿図第35 第1トレンチ遺構出土 土器実測図(10) 235は赤彩



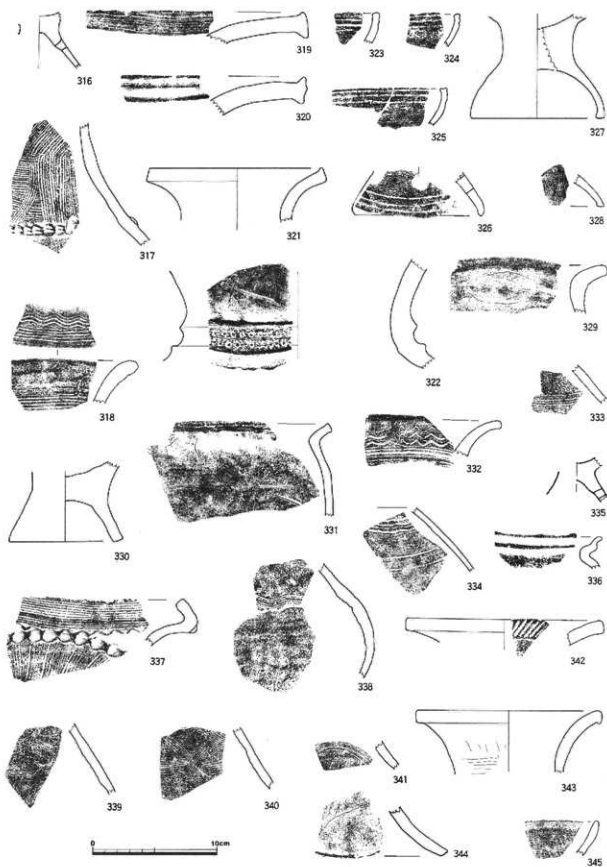
挿図第36 第1トレンチ遺構出土 土器実測図 (11)



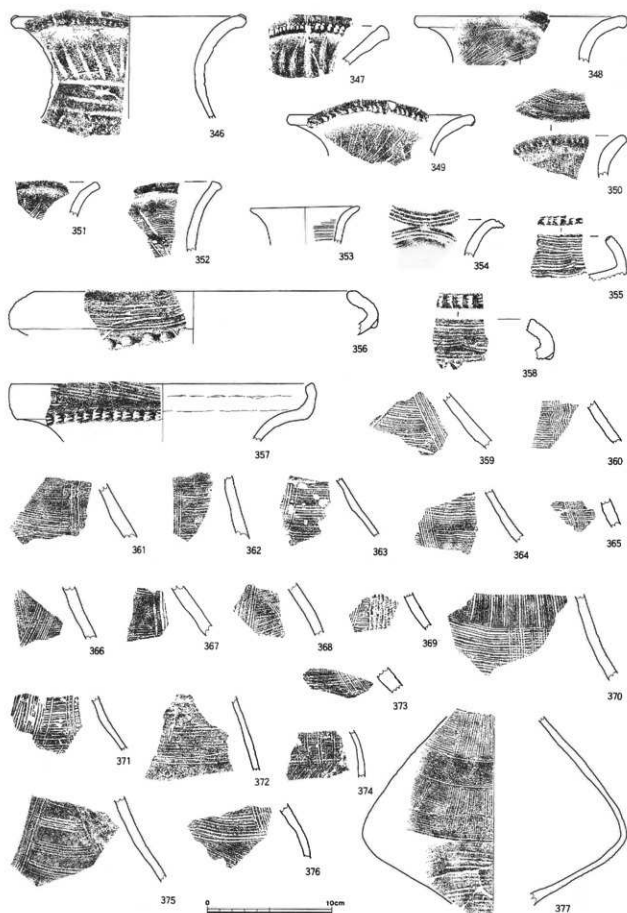
挿図第37 第1トレンチ遺構出土 土器実測図(12)



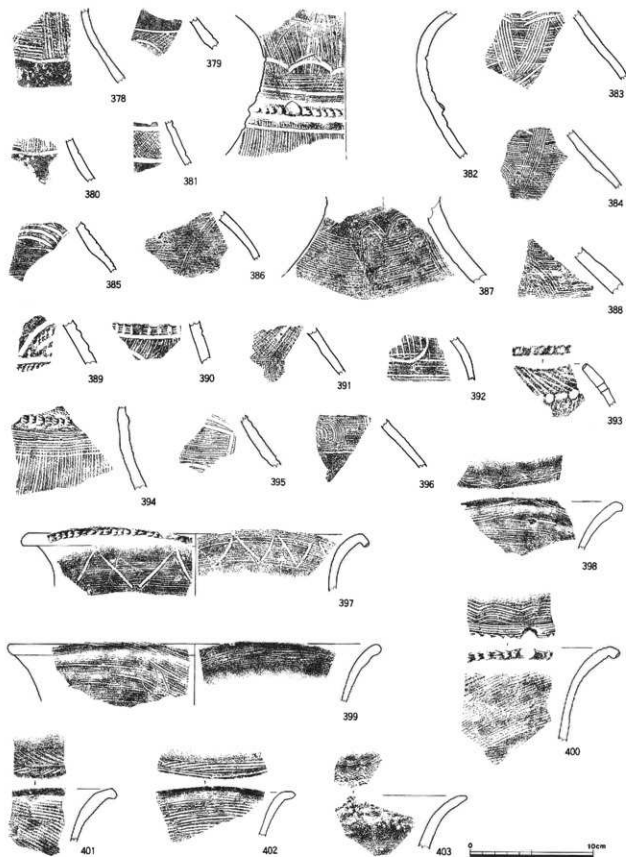
挿図第38 第1トレンチ遺構出土 土器実測図(13) 295は赤彩



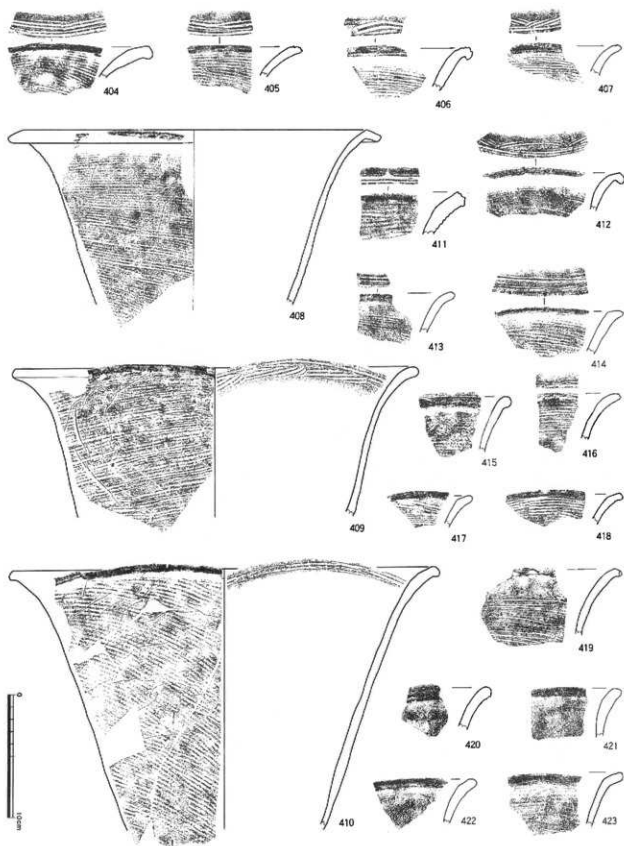
挿図第39 第1トレンチ遺構出土 土器実測図 (14)



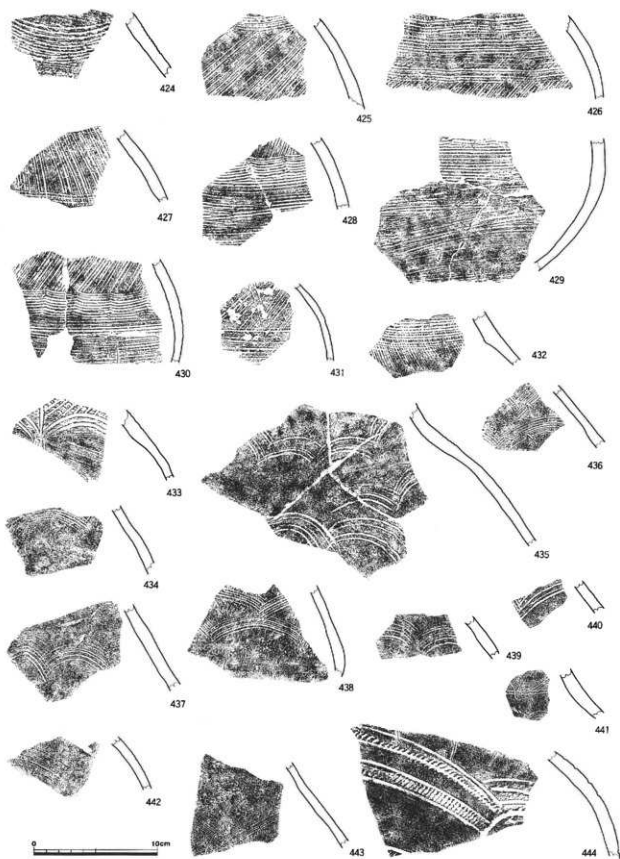
挿図第40 第1トレンチ包含層出土 土器実測図(1) 354は赤彩



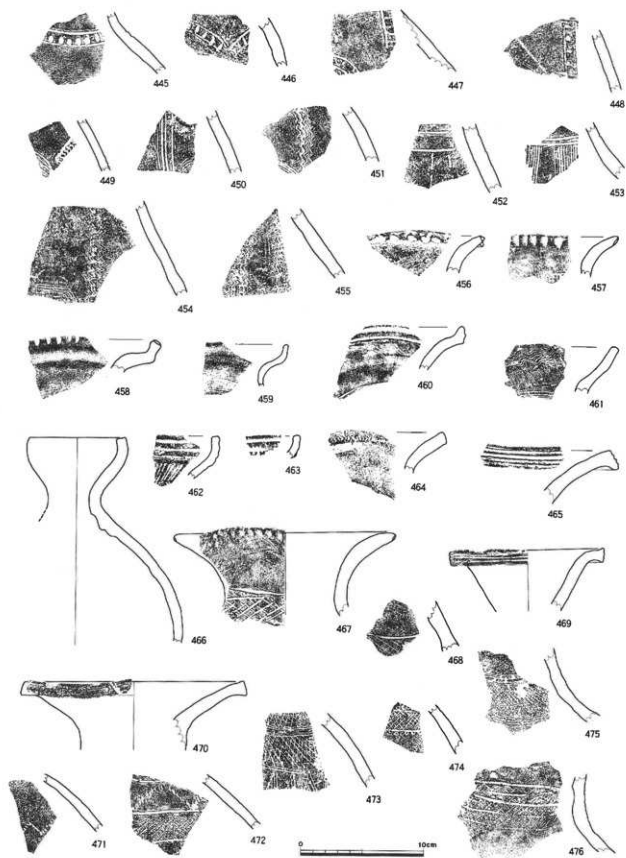
挿図第41 第1トレンチ包含層出土 土器実測図 (2)



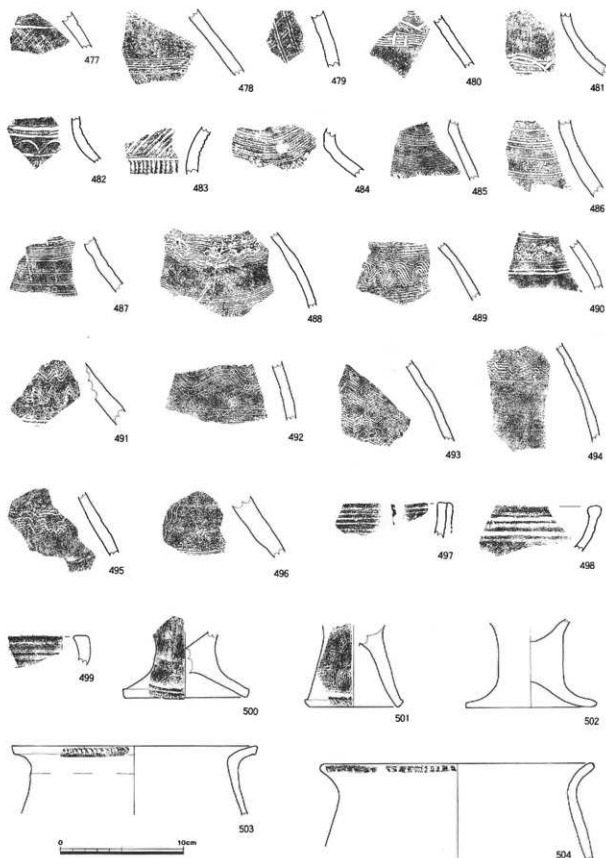
挿図第42 第1トレンチ包含層出土 土器実測図(3)



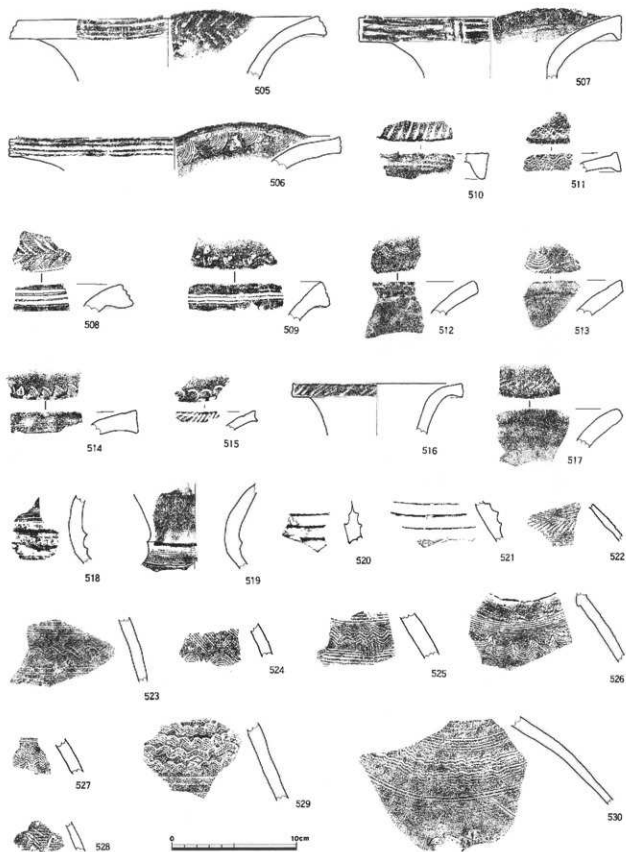
挿図第43 第1トレンチ包含層出土 土器実測図 (4)



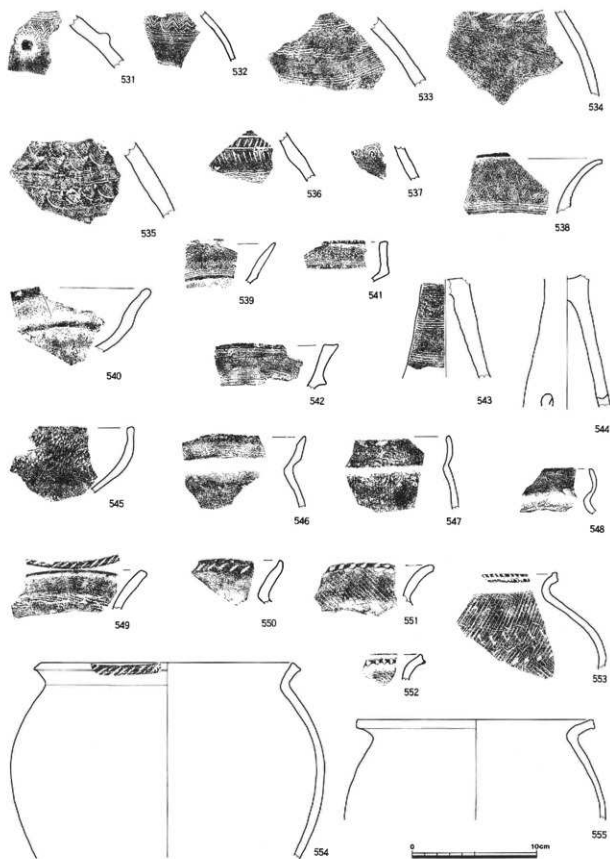
挿図第44 第1トレンチ包含層出土 土器実測図(5)



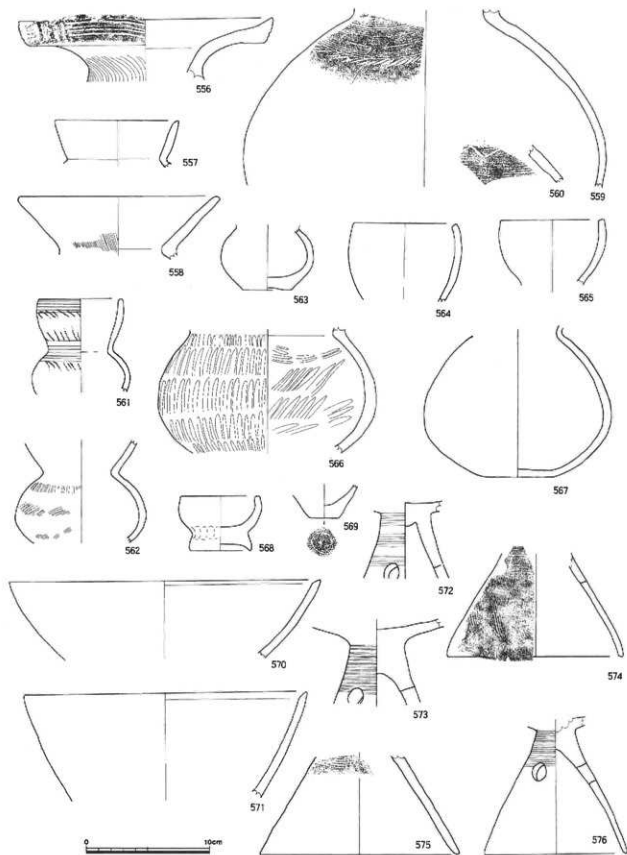
挿図第45 第1トレンチ包含層出土 土器実測図(6) 485、497は赤彩



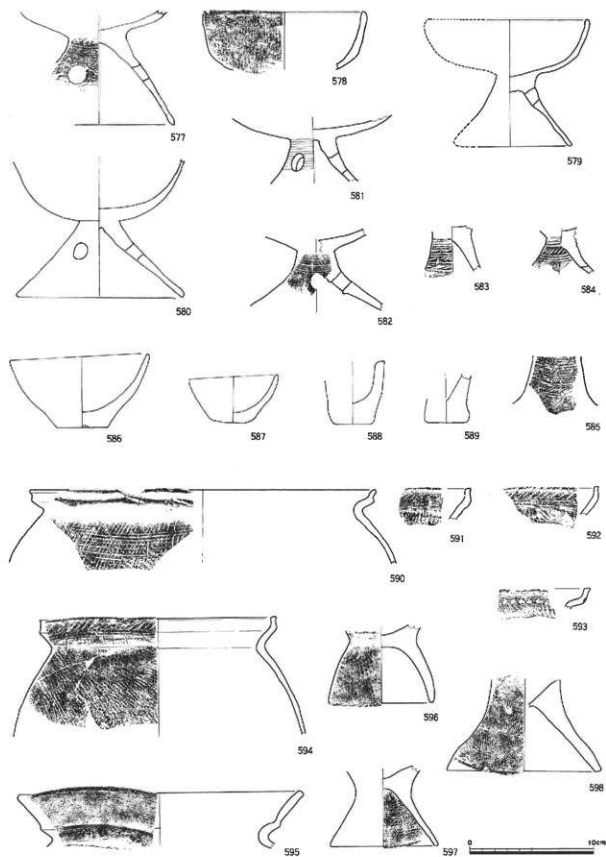
挿図第46 第1トレンチ包含層出土 土器実測図(7) 520、521は赤彩



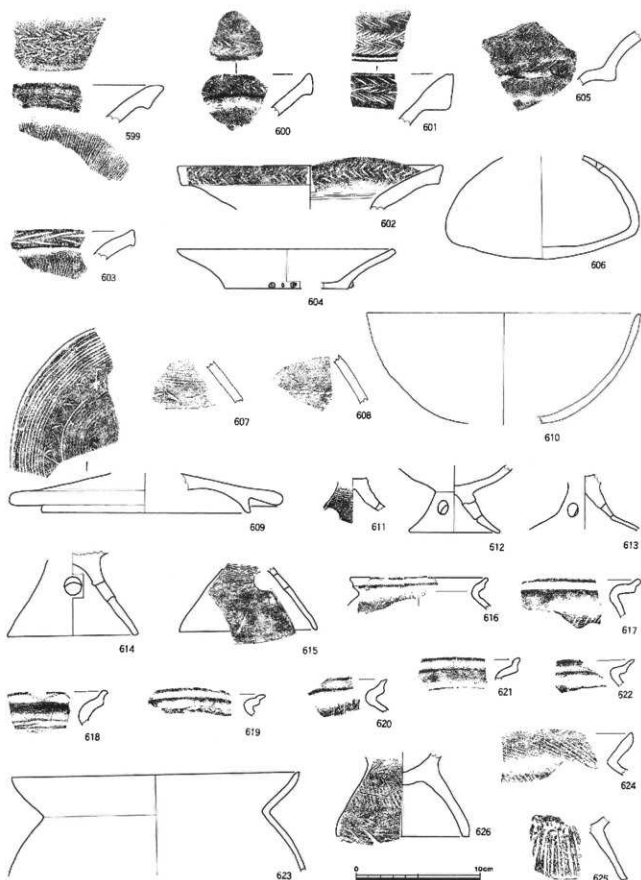
挿図第47 第1トレンチ包含層出土 土器実測図(8) 534は赤彩



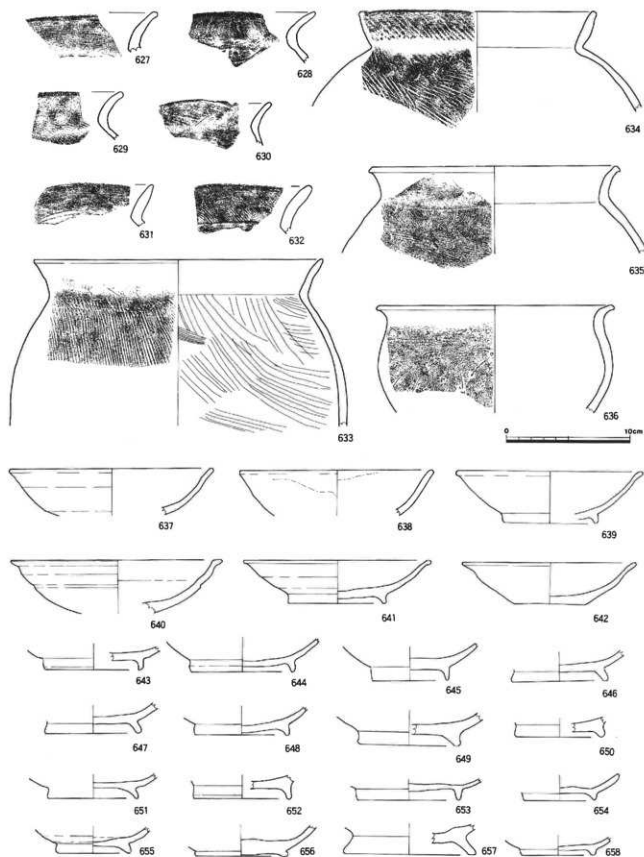
挿図第48 第1トレンチ包含層出土 土器実測図(9) 556、560は赤彩



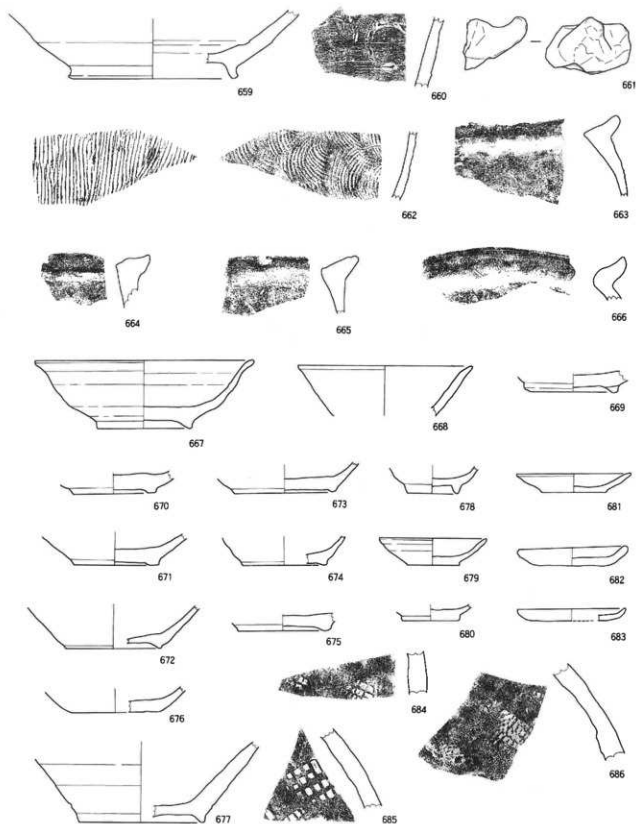
挿図第49 第1トレンチ包含層出土 土器実測図 (10)



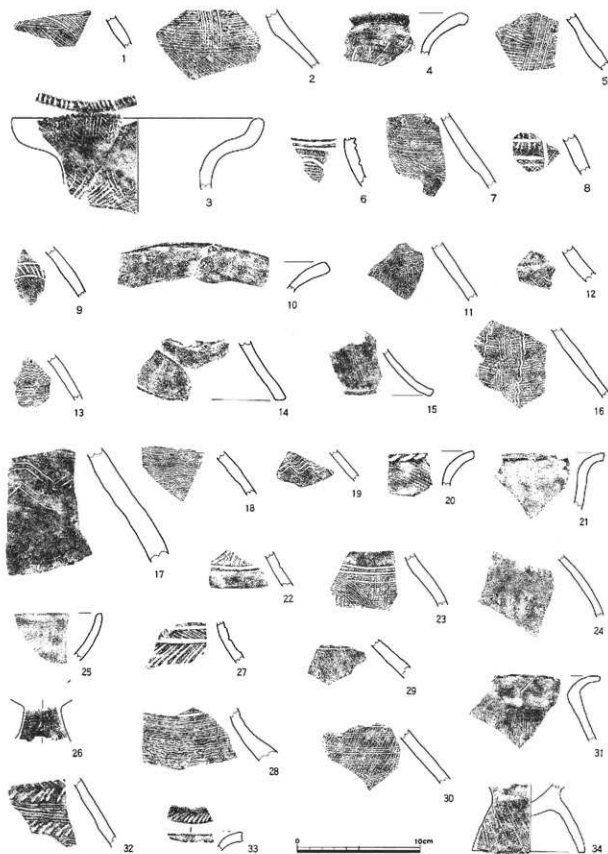
挿図第50 第1トレンチ包含層出土 土器実測図(11) 607、608は赤彩



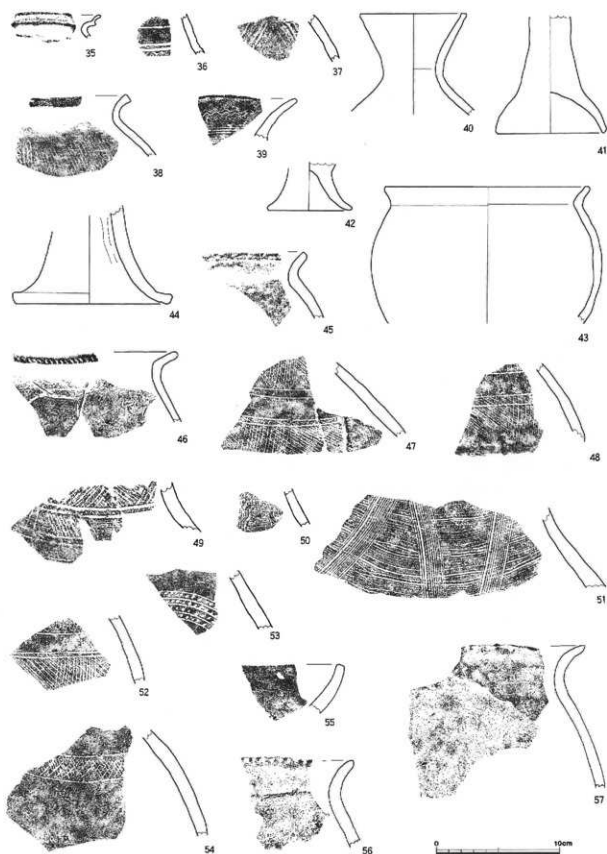
挿図第51 第1トレンチ包含層出土 土器実測図 (12)



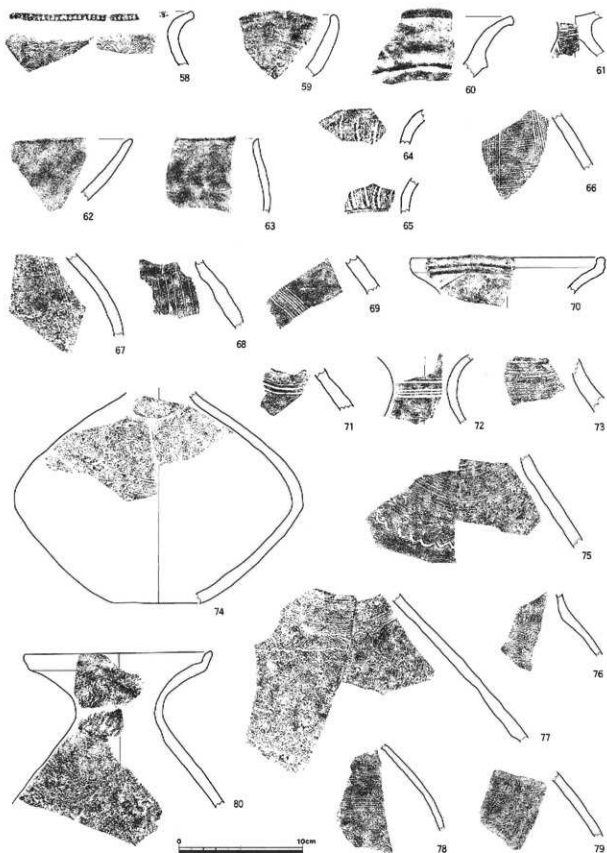
挿図第52 第1トレンチ包含層出土 土器実測図 (13)



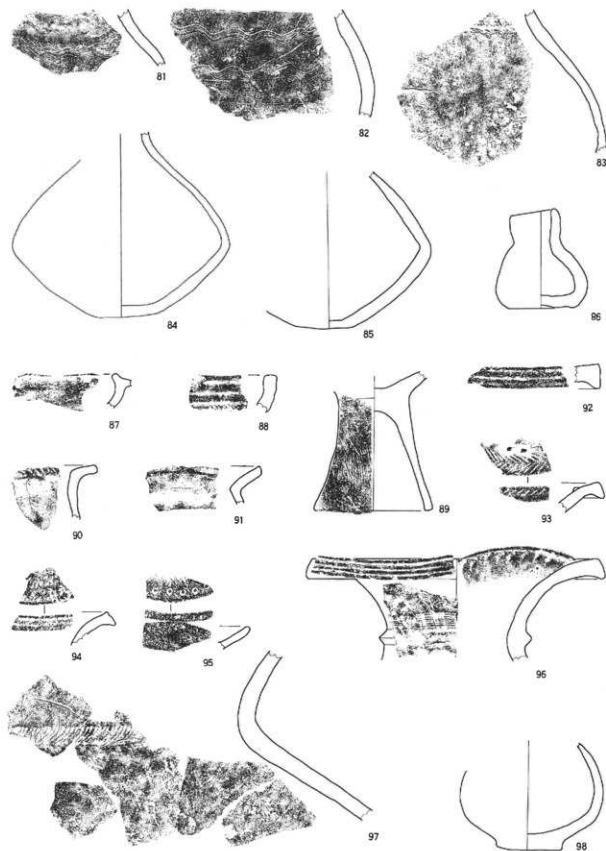
挿図第53 第2トレンチ出土 土器実測図 (1)



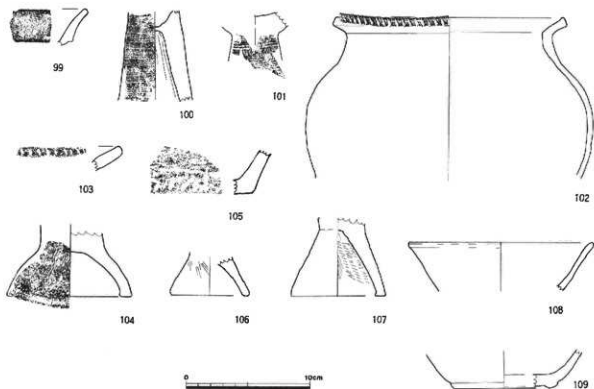
挿図第54 第2トレンチ出土 土器実測図 (2)



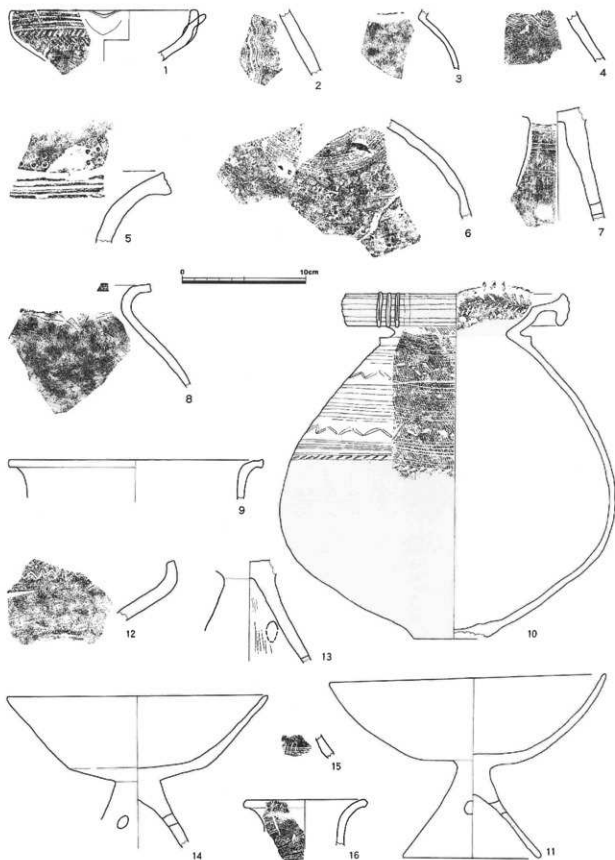
挿図第55 第2トレンチ出土 土器実測図(3)



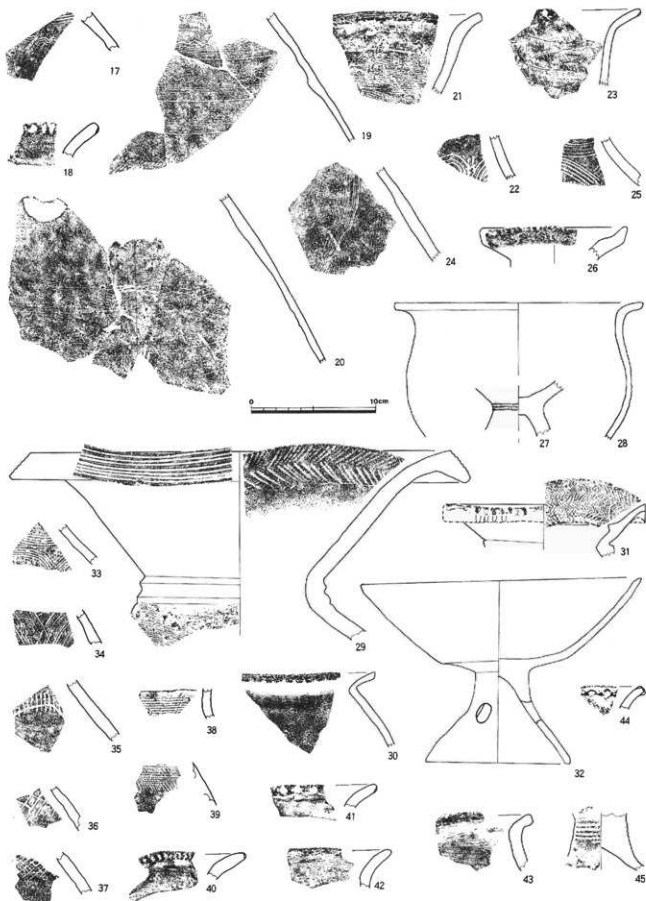
挿図第56 第2トレンチ出土 土器実測図(4)



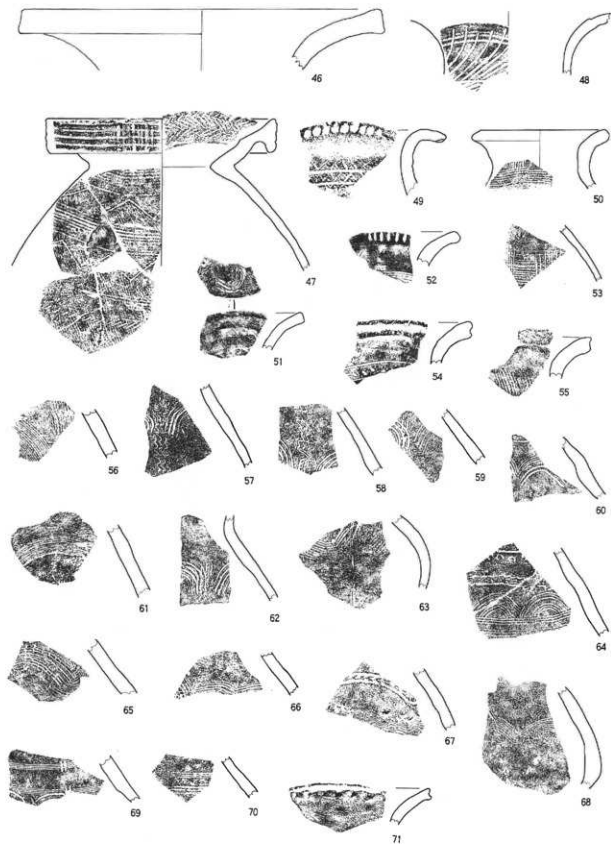
挿図第57 第2トレンチ出土 土器実測図 (5)



挿図第58 第3トレンチ遺構出土 土器実測図 (1) 8、10は赤彩

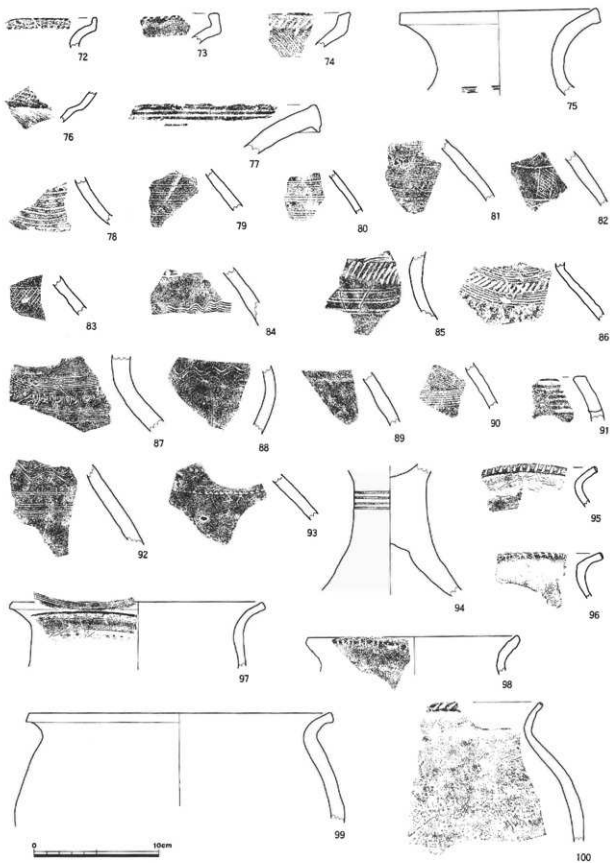


挿図第59 第3トレンチ遺構出土 土器実測図(2) 27、31は赤彩

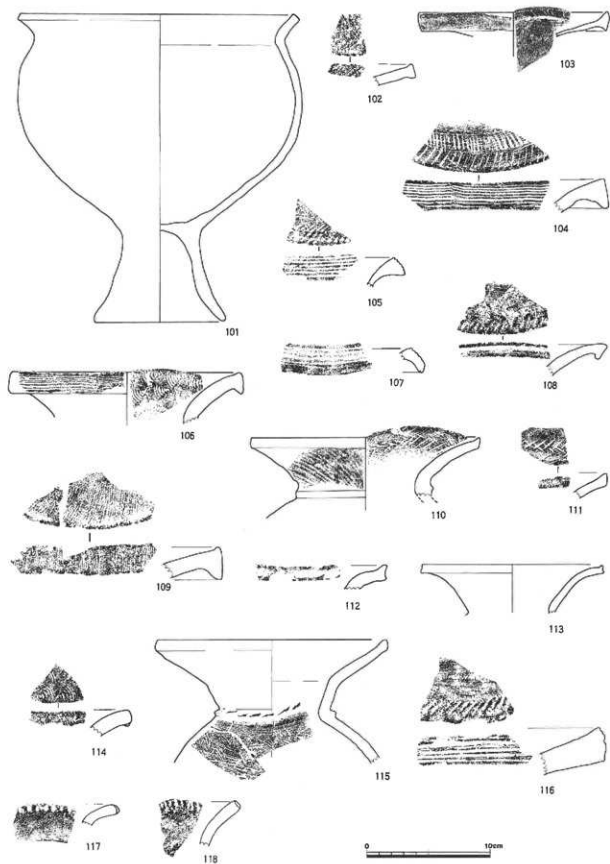


挿図第60 第3トレンチ遺構出土 土器実測図(3)

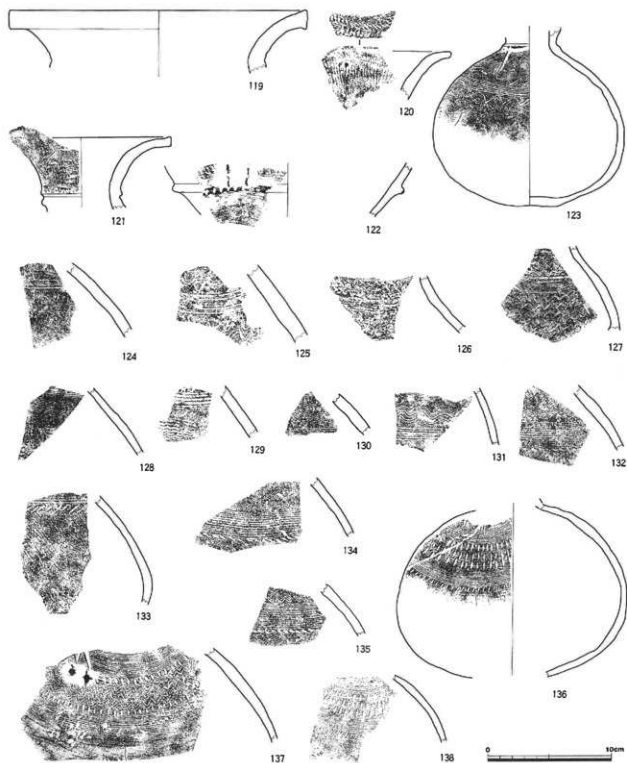
第3トレンチ包含層出土 土器実測図(1) 47は赤彩



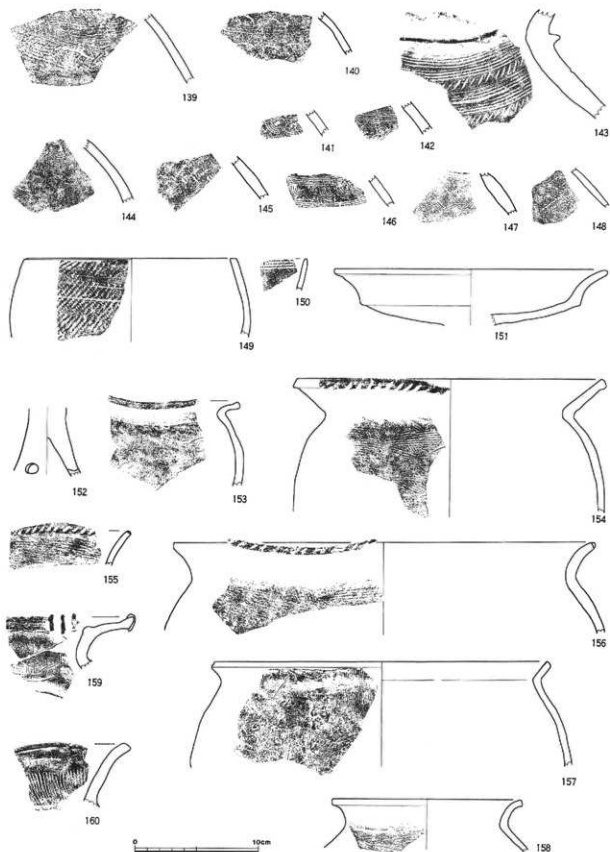
挿図第61 第3トレンチ包含層出土 土器実測図(2) 94は赤彩



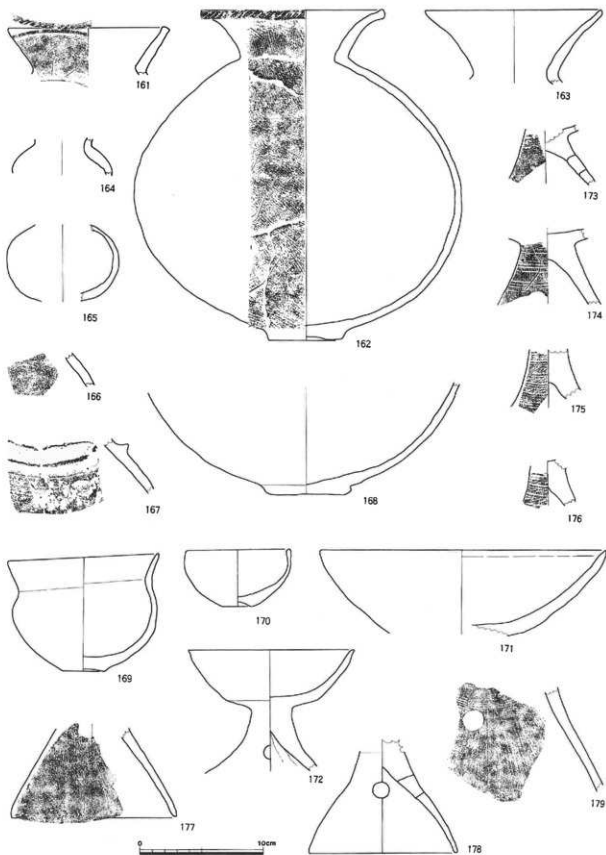
挿図第62 第3トレンチ包含層出土 土器実測図 (3)



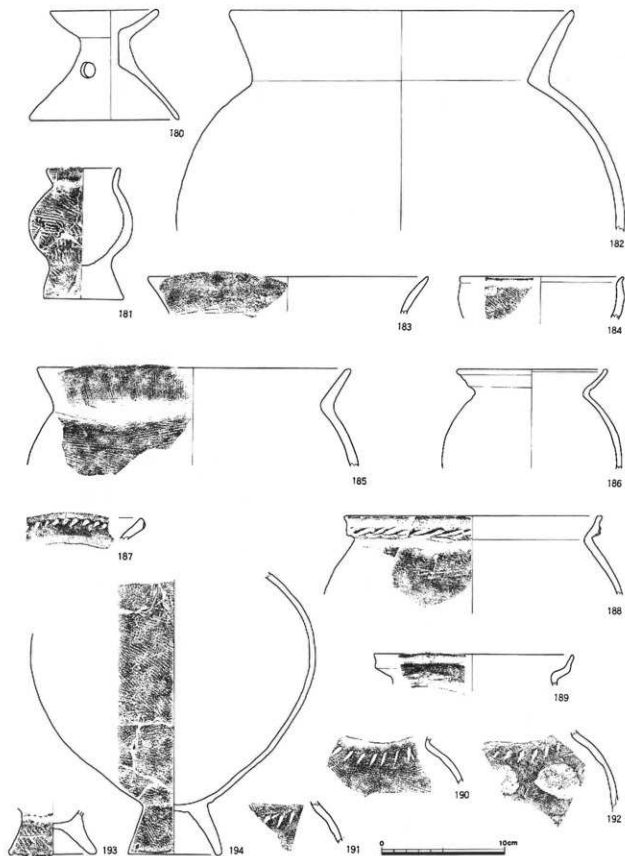
挿図第63 第3トレンチ包含層出土 土器実測図(4) 137は赤彩



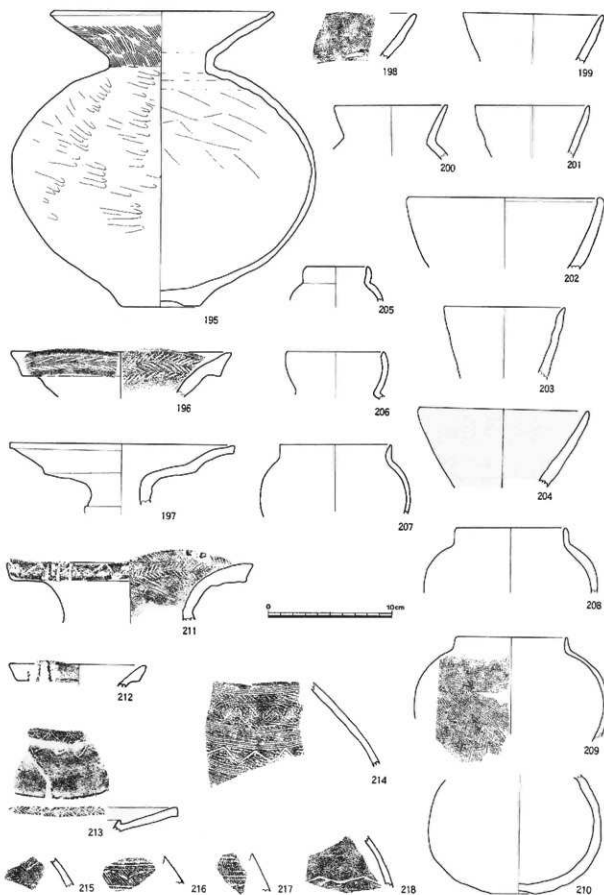
挿図第64 第3トレンチ包含層出土 土器実測図(5)



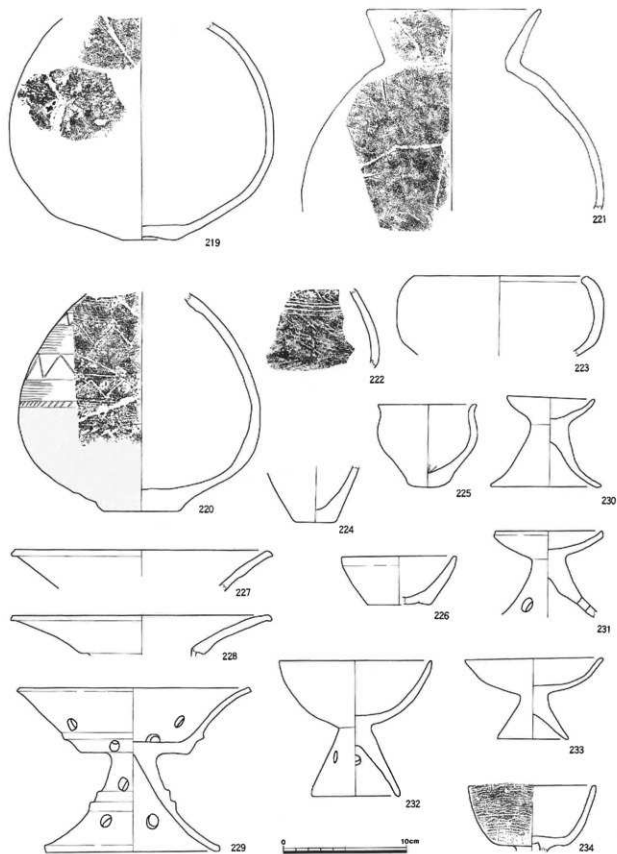
挿図第65 第3トレンチ包含層出土 土器実測図(6) 167は赤彩



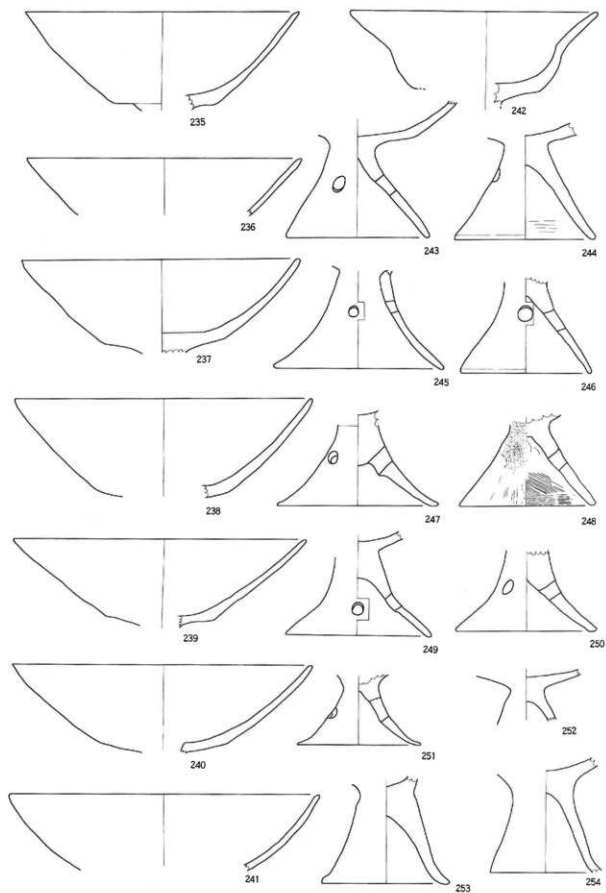
挿図第66 第3トレンチ包含層出土 土器実測図(7)



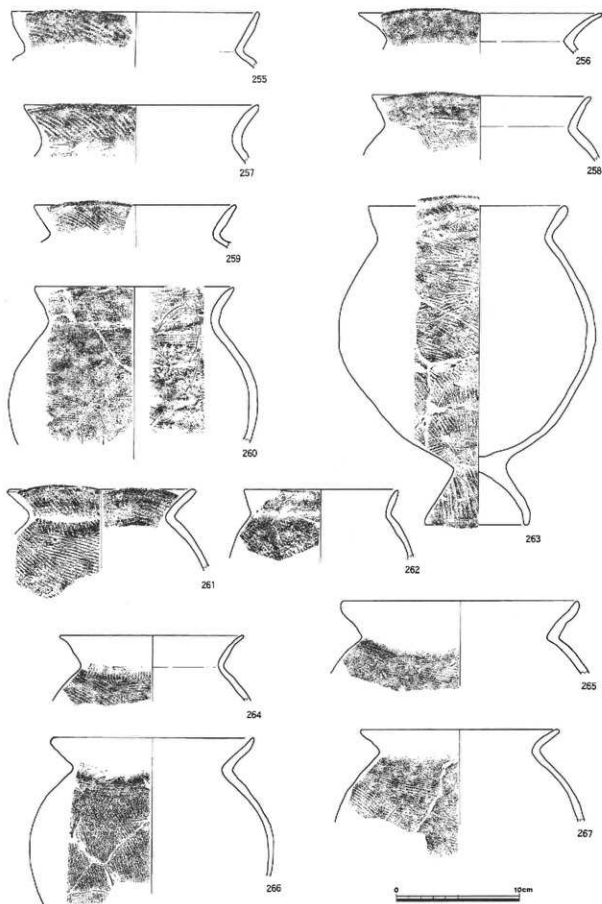
挿図第67 第3トレンチ包含層出土 土器実測図(8) 204、211、213、218は赤彩



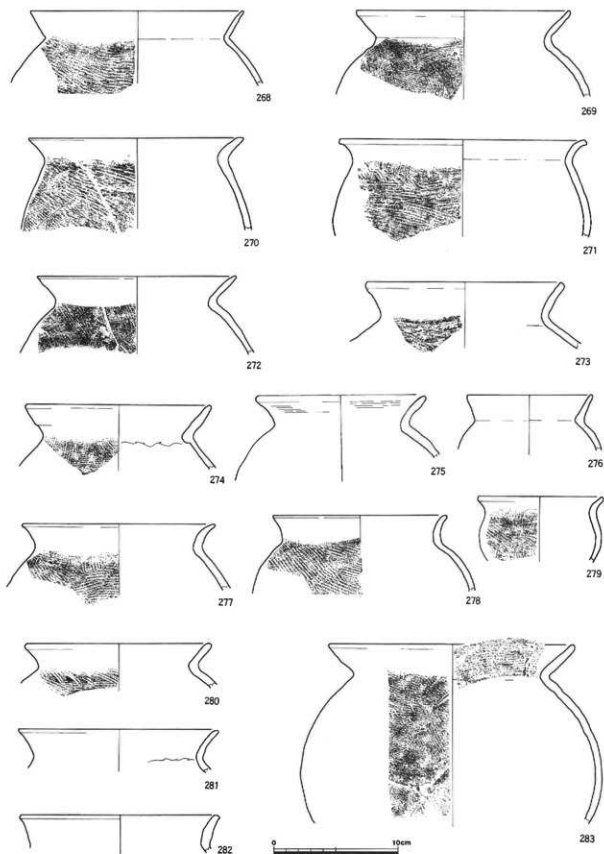
挿図第68 第3トレンチ包含層出土 土器実測図(9) 220、222は赤彩



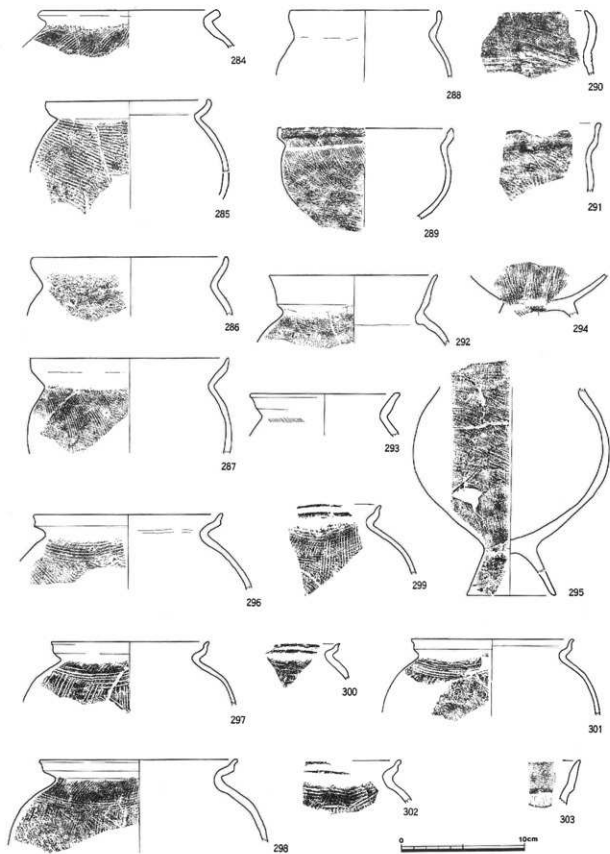
挿図第69 第3トレンチ包含層出土 土器実測図(10)



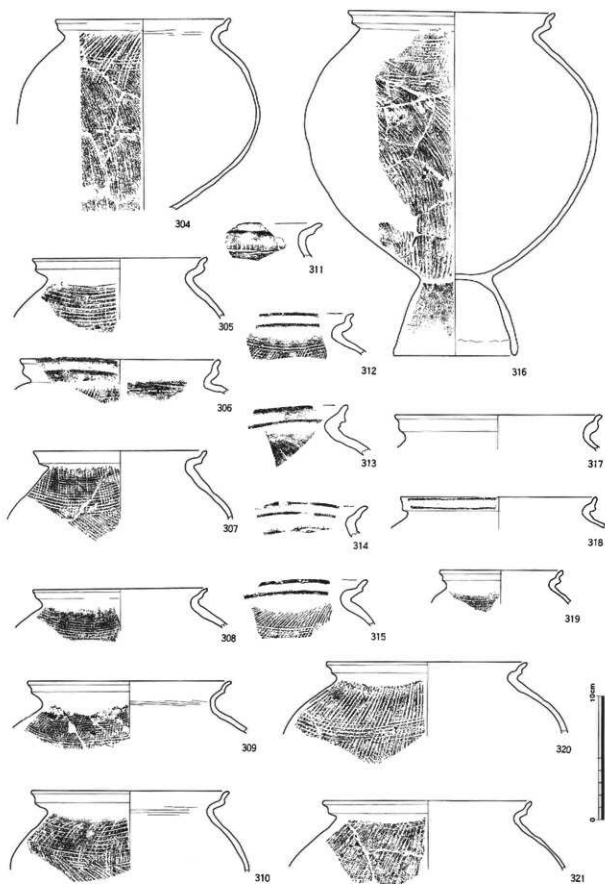
挿図第70 第3トレンチ包含層出土 土器実測図 (11)



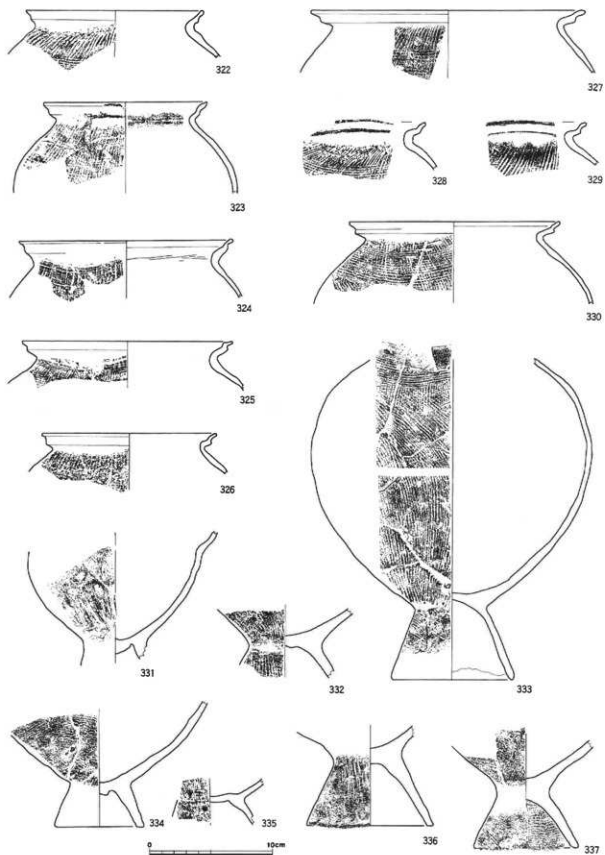
挿図第71 第3トレンチ包含層出土 土器実測図 (12)



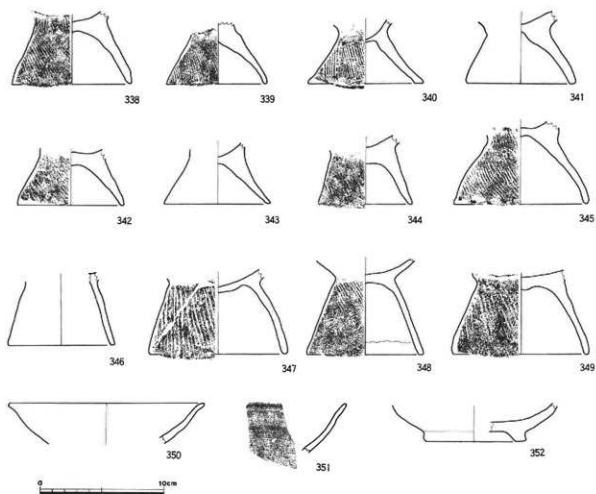
挿図第72 第3トレンチ包含層出土 土器実測図(13)



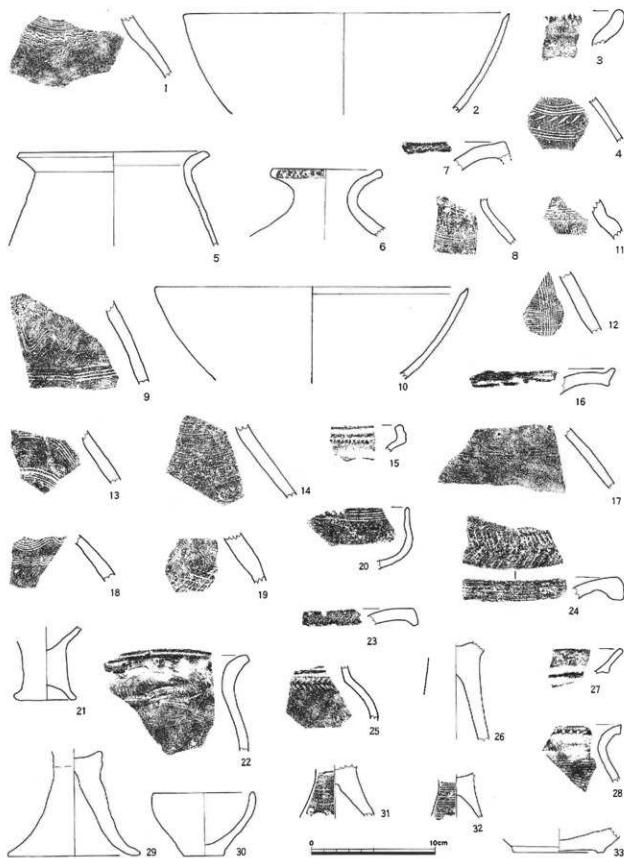
挿図第73 第3トレンチ包含層出土 土器実測図 (14)



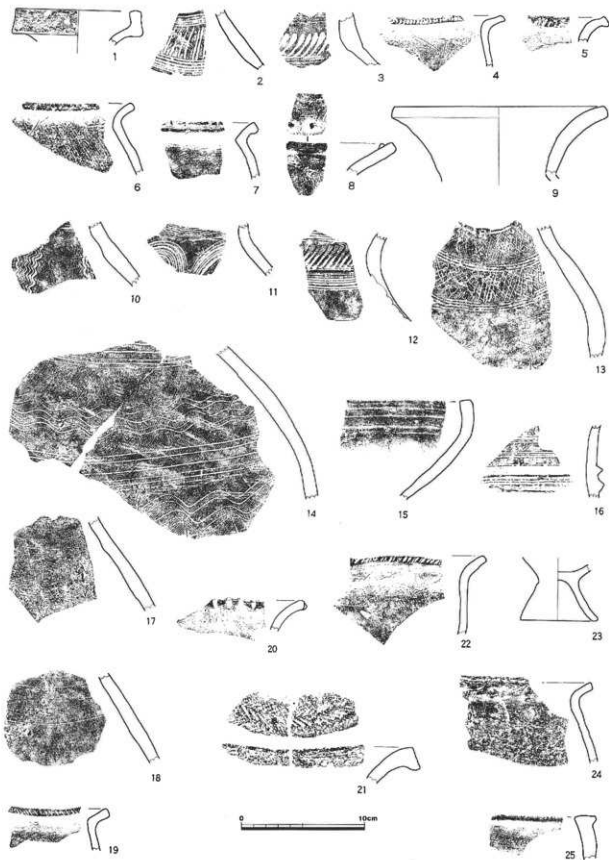
挿図第74 第3トレンチ包含層出土 土器実測図 (15)



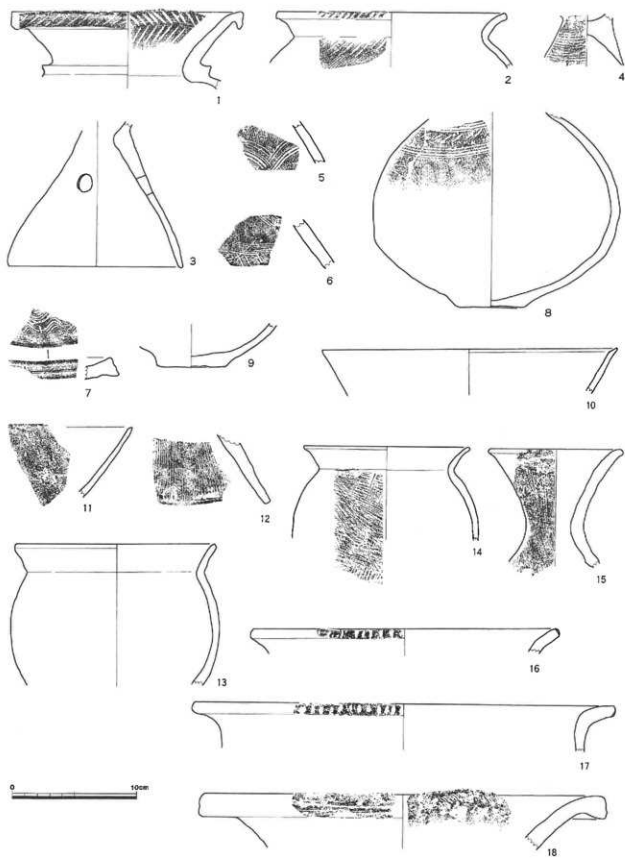
挿図第75 第3トレンチ包含層出土 土器実測図 (16)



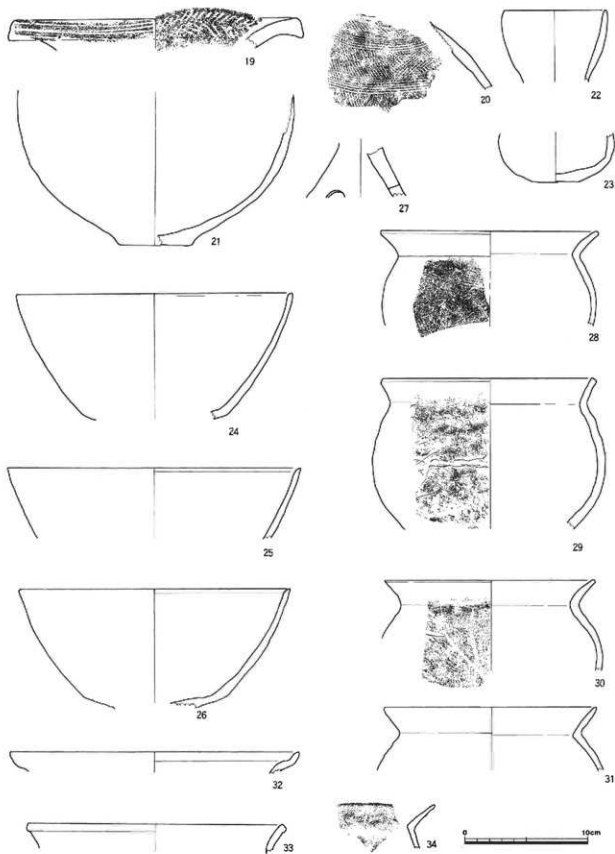
挿図第76 第1グリッド出土 土器実測図 3、25は赤彩



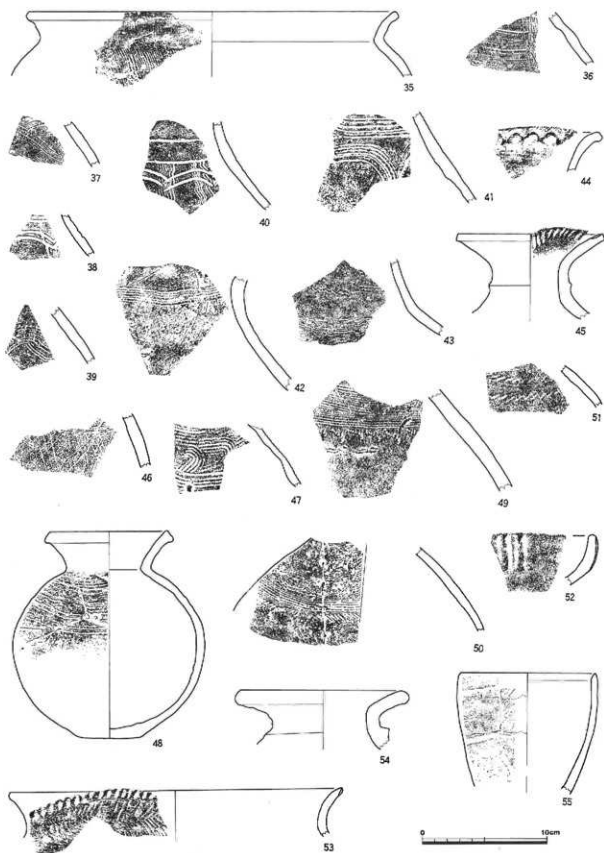
挿図第77 第2グリッド出土 土器実測図



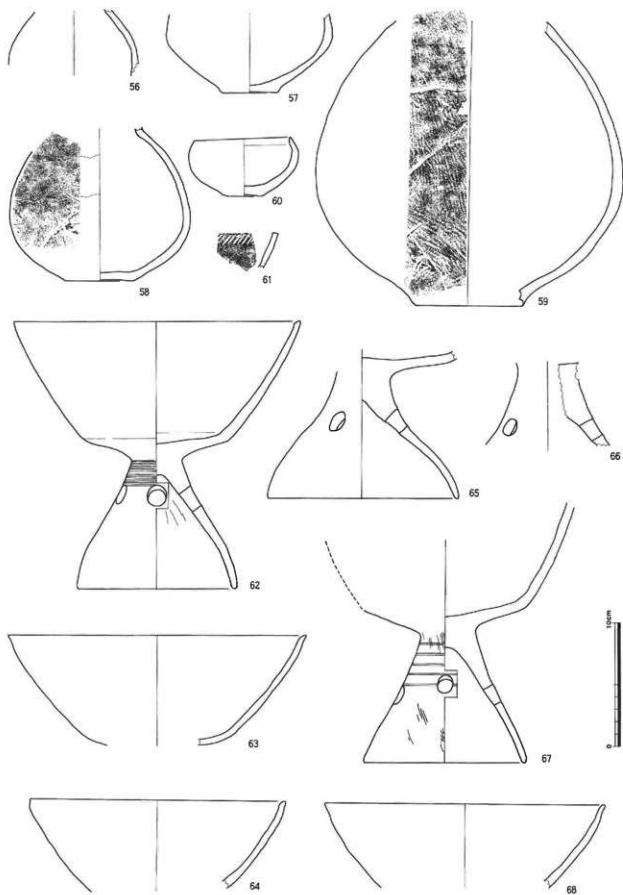
挿図第78 第3グリッド遺構出土 土器実測図(1)



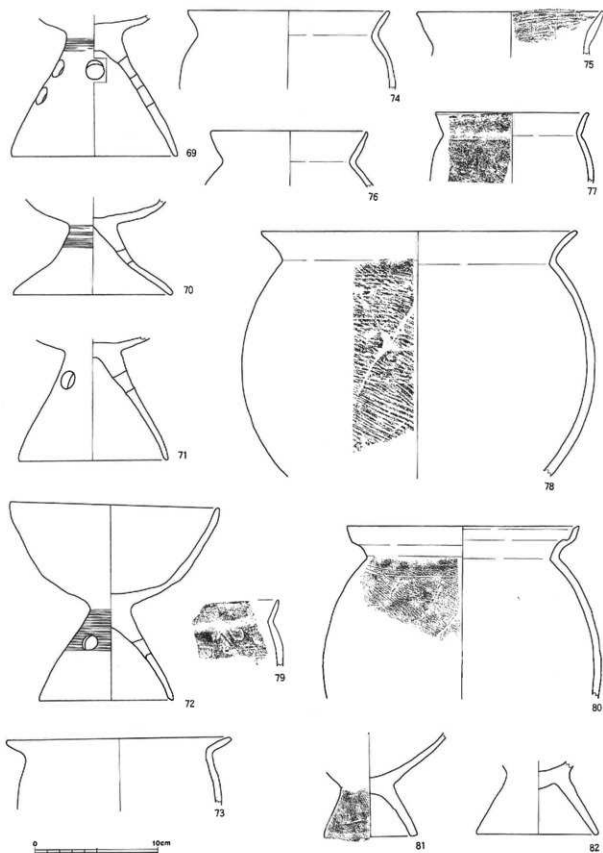
挿図第79 第3グリッド遺構出土 土器実測図(2)



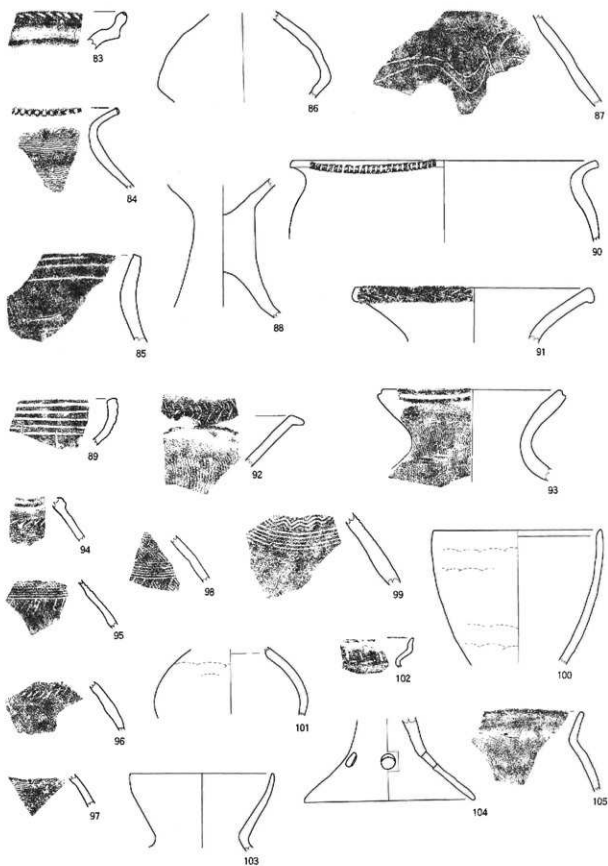
挿図第80 第3グリッド遺構出土 土器実測図 (3)



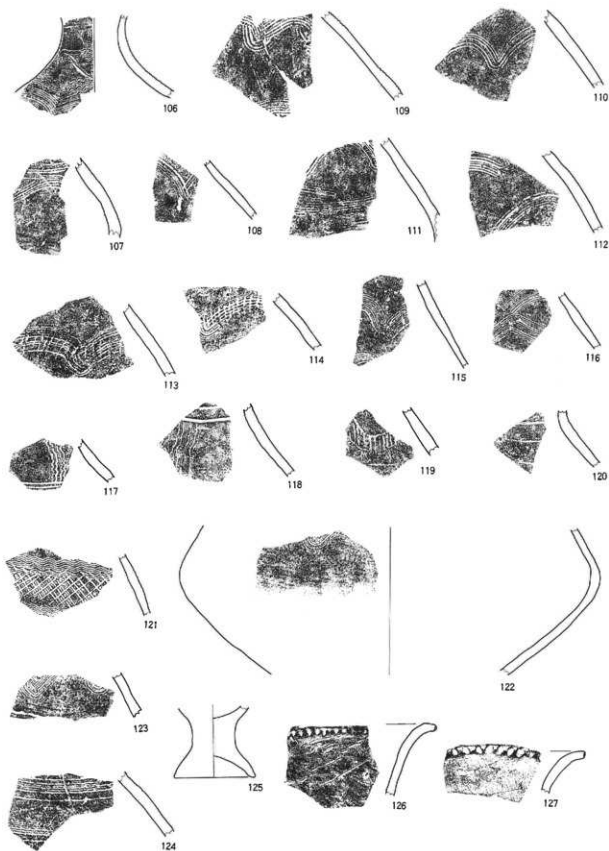
挿図第81 第3グリッド遺構出土 土器実測図(4)



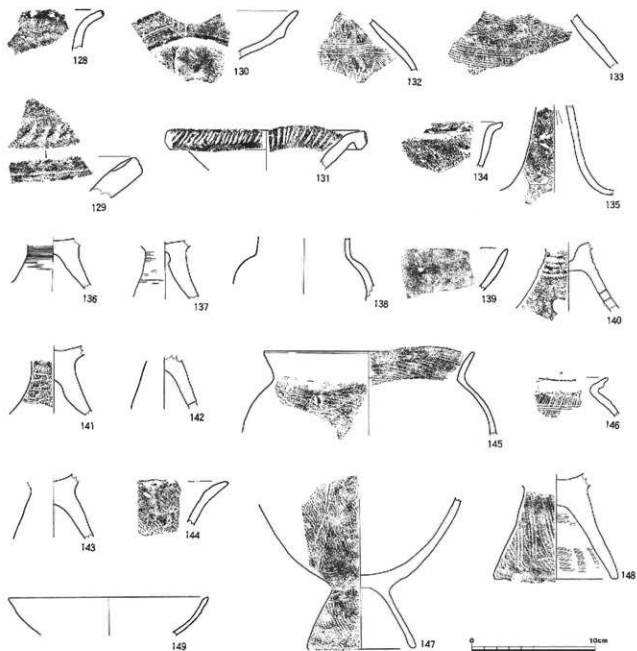
挿図第82 第3グリッド遺構出土 土器実測図 (5)



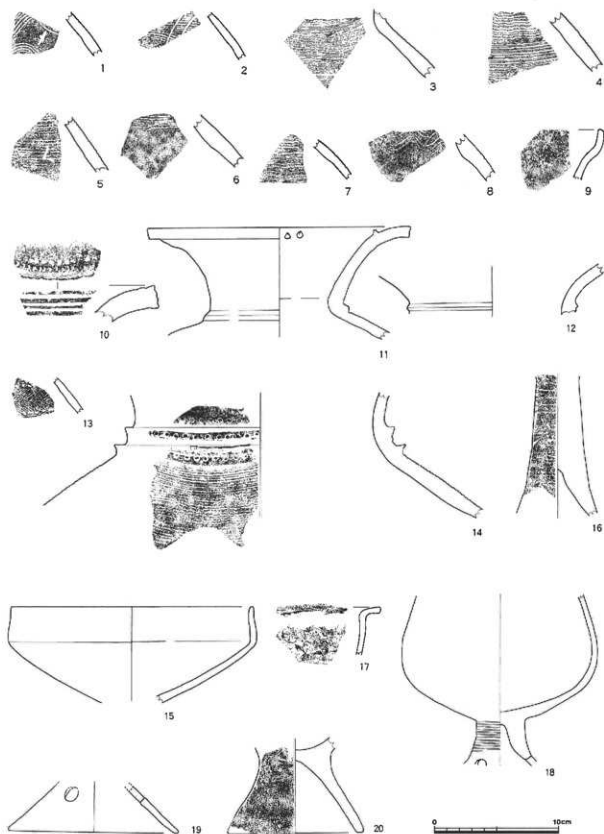
挿図第83 第3グリッド遺構出土 土器実測図(6)



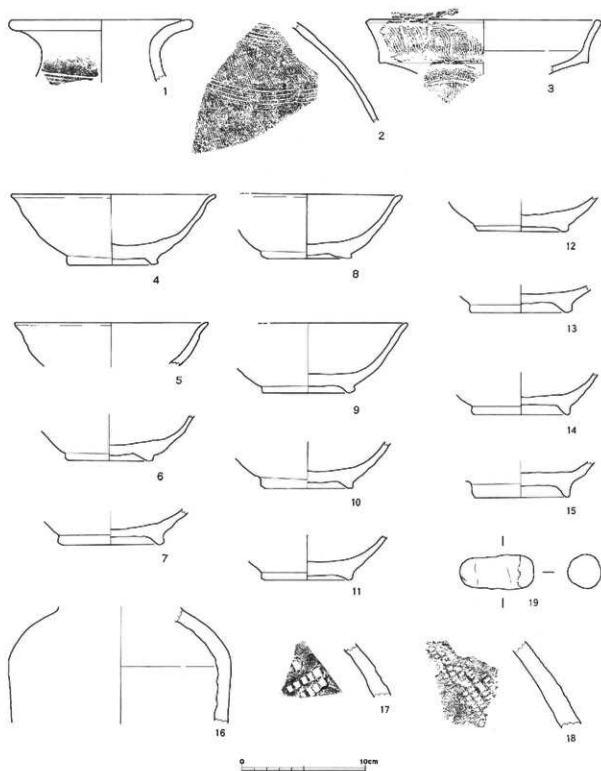
挿図第84 第3グリッド包含層出土 土器実測図 (1)



挿図第85 第3グリッド包含層出土 土器実測図(2)



挿図第86 第4グリッド出土 土器実測図



挿図第87 表採土器実測図 (1は鹿音橋上流で採集)